

**南スラヴ人統一国家構想の起源と展開  
1917年「コルフ宣言」に至る過程**

**材木和雄**

**広島大学総合科学部**

**広島大学平和科学研究センター兼任研究員**

**A Short History of the South Slav Unification Movement:  
From the Illyrian Conception of 1830s to the Corfu  
Declaration in 1917**

**Kazuo ZAIKI**

**Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University**

**Research Associate, Institute for Peace Science, Hiroshima University**

**SUMMARY**

Yugoslavia was established in 1918 and broke down in 1991 with interethnic war. During 70 years of its history, there was almost always a manifest or latent conflict on

the power distribution of the state. Before World War I, there was the Croatian question initiated by the Croats fighting for autonomy against Serbia wanting to keep the power under the central government. After World War I, when the Communists reconstructed Yugoslavia as a federal state, Serbia lost hegemony and was reduced to one republic with two autonomous provinces. The dissatisfied Serbs deprived of the power raised the Serbian question.

The author argues that Yugoslav conflict was already seeded before Yugoslav state started in 1918. It was originated in the Corfu Declaration announced in July 1917, a joint statement in which the Serbia's government and the Yugoslav Committee agreed to work for union and a 'constitutional, democratic and parliamentary monarchy under the Karadjordjevic dynasty'. The significance of the agreement was at first lie in the point that it became a blueprint for a forthcoming new state.

However, it was a compromise in which all the divisive issues were put aside. One of the biggest problems was that they left unclear whether a state would be unitary or federal. Though Trumbić, the chairman of the Yugoslav Committee refrained from using the word of 'federal', he was decidedly against centralism espoused by the Serbia's perennial premier, Nikola Pašić. Instead, Trumbić spoke in favor of limiting the power of the future central government to foreign and military affairs, customs, currency and credit, postal service, and transportation, leaving the internal affairs, education, judiciary, and most economic matters outside its competence.

Pašić was in favor of fairly extensive local autonomy, but administrative units could not be historical entities. Significantly, the Corfu Declaration made no mention of any historical territories, so that it was later interpreted as break with historical right and the legitimacy of provinces. The Yugoslav Committee chose not to oppose such matters. When the new state started, it did not guarantee the Croatia's historical right, so that the Croats lost their national identity.

Moreover, the Corfu Declaration included no provision on the temporary measures until the new constitution would be adopted. Thus, later, for its first two years, the new Yugoslav state was administered by old Serbia's army and bureaucracy according to old Serbia's constitutional and political models. That exacerbated the tension and differences among ethnic and social constituencies, typically those among the Serbs and the Croats.

## 1 はじめに

1991年のユーゴスラヴィア危機において、最大の争点は国家制度であった。セルビアとモンテネグロは連邦制国家を維持することを主張し、スロヴェニアとクロアチアは、連邦制を廃止し、国家連合に再編することを求めた。各共和国元首による調整交渉は不調に終わり、スロヴェニアとクロアチアは6月に連邦からの独立を宣言した。翌1992年、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナとマケドニアも独立を宣言し、セルビアとモンテネグロは独自の連邦国家を組織した。かくてユーゴスラヴィアは解体した。この経過の中で、クロアチアとボスニア＝ヘルツェゴヴィナでは、領土をめぐる民族間の戦争が起こったことは周知の通りである。

ユーゴスラヴィアは、第一次世界大戦終結直後の1918年12月に、「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人の王国」として発足した。70年余に及ぶその歴史は、国家制度をめぐる民族対立の歴史であった。かつて私は次のように書いたことがある。「多民族国家のユーゴにとって最大の不安定要因は、この国の二大民族であるセルビア人とクロアチア人が国家形態をめぐる相容れない政治志向を有していたことであった。歴史的にいえば、ユーゴが中央集権国家の形態をとり、セルビアがその覇権を握っていた時代には、クロアチア人の政治家は連邦主義的な要求をかかげて激しい政治闘争を行った。だから両大戦間期のユーゴの大きな問題は『クロアチア問題』であった。しかしパルチザン戦争を経由して戦後に誕生した社会主義ユーゴが連邦主義の国家形態を採用したとき、セルビアとセルビア人の処遇が大きな問題になった」<sup>1</sup>。経過は省略するが、その最終的な結末がユーゴスラヴィアの解体であった。

国家制度をめぐる民族間の意見の対立は、この国家が成立する以前から存在した。そもそもユーゴスラヴィアはクロアチア人が考え出した国家構想であった。南スラヴ人の統合運動にもっとも熱心だったのはクロアチア人であり、セルビア人はこの運動に当初は乗り気ではなかった。南スラヴ人の統合についても、セルビア指導者の目標はセルビア民族国家の拡大であり、スロヴェニア人やクロアチア人をパートナーと認めて合同国家を形成することではなかった。

ではどうしてユーゴスラヴィアという国は成立することになったのか。この問いは、ユーゴスラヴィアとは何であったのかという問題にも重なる。これに答えるためには、ユーゴスラヴィアの生いたちを知ることが必要であろう。本稿は、セルビア政府とユーゴスラヴィア委員会が南スラヴ人統一国家の樹立を合意した1917年の「コルフ宣言」を一つの到達点とみて、そこに至る過程を検証したい。

## 2 南スラヴ人統一国家構想の前史

ユーゴスラヴィアという言葉は元来「南スラヴ人の国」を意味する。バルカン半島中西部に広がる地域を指す言葉であり、そこには南スラヴ語系の言語を話す人びとが多く住んでいる。しかし、それは単に地域の名称であるだけでなく、それまで別々の国に分かれていた南スラヴ人を統合して新しい国家を創造しようとする運動でもあった。

1918年に成立した統一国家に名称を与えた、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の三民族は、南スラヴ系の民族に属している。このうちクロアチア人とセルビア人はほぼ同一の言語を使用する。スロヴェニア人は、セルビア人やクロアチア人とはやや異なった言葉を使すが、彼らは相互に意思疎通が可能である。こうした言語的類縁性は南スラヴ統一主義（ユーゴスラヴィズム）の基礎となった。それにもかかわらず、これらの三民族は、7世紀にバルカン半島に定住を完了して以来、近代に至るまで相互に異なった歴史を歩んできた。彼らは共通の国家を形成したことがなかった。宗教、文字、文化的伝統、社会構造などの点でも大きな相違があった<sup>2</sup>。

スロヴェニア人は一度も独立国家を形成することなく、その居住地は13世紀にハプスブルク家の支配下に入った。クロアチア人は11世紀に統一王国を形成したが、12世紀には隣国のハンガリー王を国王とし、さらに16世紀にはハンガリー王位を獲得したオーストリアのハプスブルク家の支配を受け入れた。セルビア人も12世紀から14世紀にかけて統一国家を形成したが、15世紀にはオス

マン・トルコの支配に服することになった。

トルコによるバルカン半島の征服は南スラヴ人に大きな影響を及ぼしたが、その一つはトルコの支配を逃れたセルビア人が北方および西方への移住し、セルビア人の居住地がバルカン半島中西部に拡散するとともに、クロアチア人の居住地と交錯するようになったことである<sup>3</sup>。その結果、ハプスブルク帝国は、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人を被支配民族として抱えることになった。しかし、スロヴェニア人とクロアチア人は異なった行政単位に属し、また正教徒であるセルビア人は、カトリック教徒のクロアチア人とコミュニティを別にしたため、三者は相互に接触することが少なかった。しかも、それぞれの民族の生活圏は地域的に分断されており、他の地域に居住する同じ民族集団同士がナショナル・アイデンティティを共有することもなかった。

19世紀初頭には、バルカン半島の南スラヴ人は民族的に未分化の状態に近かったと考えられる。少なくともベネディクト・アンダーソンのいう「想像の共同体」としての民族意識は民衆レベルにまで普及していなかった。しかし、19世紀は民族の覚醒の世紀と呼ばれ、ナショナリズムがヨーロッパ各地に波及していく時代であり、バルカン半島においても各民族の知識人および政治エリートは民族形成と国家形成の運動を推進した。その場合、自民族の民族意識を明確にし、それぞれの民族国家の樹立を目標するという個別の民族主義が出現したのは当然である。しかし、南スラヴ人の諸地域、とくにクロアチアにおいて注目すべきことは、このような個別の民族主義と同時併存する形で、南スラヴ人の大同団結を訴える南スラヴ統一主義の潮流が出現し、大きな影響力を有したことである。

南スラヴ統一主義の起源は、「イリリア運動」と呼ばれた民族運動に遡る。時代は1830年代から1840年代のことである。当時クロアチアを支配していたハンガリーは、クロアチアの学校教育にマジャール語を義務づけるなど同化主義政策を進めていた<sup>4</sup>。これに反発した一部の知識人はクロアチア人の民族意識の覚醒を促す運動を始めた。その先頭に立ったのがリュージェヴィト・ガイという文学者である<sup>5</sup>。イリリア運動の参加者は、クロアチアの公用語はクロアチア人の言語でなければならないと考え、クロアチア語の文章語の標準化を開始し、

新聞や雑誌など出版物を通してその普及を進めた<sup>6</sup>。南スラヴ人の話す言語のうち、クロアチア人とセルビア人が話す言語は、英語のwhatにあたる疑問詞の呼び方を基準に三つの方言に分けられる。チャ方言、カイ方言、シュト方言の三者である。チャ方言はアドリア海岸地方の人びとが用い、カイ方言はクロアチア北部で用いられ、シュト方言は上記以外の地域のクロアチア人とセルビア人のすべてによって使われている。注目すべきことは、ガイらはシュト方言をクロアチア語の正書法の基本に据えたことである。というのは、クロアチアの首都ザグレブとその周辺部ではカイ方言が優勢であり、クロアチア語といえば通常はカイ方言を指していたからである。

ガイらがあえてシュト方言をクロアチア語の基礎に採用したことには、戦略的理由があった。それは、より多くの地域の人びとが使用するシュト方言を基礎に据える方が、この文章語をクロアチア人全体の居住地域に普及させ、分割支配によって地域的に分断されていたクロアチア人ならびに南スラヴ人を言語的に統合する上でより効果的だと考えたからであった。ガイはクロアチア人の統一言語に対して、カイ方言のニュアンスの強いクロアチア語を避けて、中立的な「イリリア語」という名称を使った。イリリア運動は若年知識人層に共感を引き起こして、多くの文学作品が出版され、クロアチア語の文語表現の定着に貢献した。またイリリア党という政党も誕生した。

イリリア運動はクロアチアの民族運動の色彩が強い。それは、第一義的にはクロアチア人の民族的な自覚と統合を促す運動であった。それにもかかわらず、イリリア運動が南スラヴ統一主義の端緒と位置付けられるのは、そこに共通の文章語に基づいて南スラヴ人を統合するという考えが含まれていたからである。クロアチアの文章語の基礎としたシュト方言はセルビア人によっても話されるものであったため、イリリア語がセルビア人を含めて南スラヴ人の統一言語になることを彼らは願った。さらにガイらがこの運動に「イリリア」の名を与えたもう一つの理由は、ローマ帝国時代のバルカン半島の先住民であったイリリア人を南スラヴ人に共通の祖先であると考え、イリリアという言葉に南スラヴ人の政治的、文化的な統合のシンボルを見出したことにある<sup>7</sup>。

このイリリア運動はクロアチア以外の地域ではほとんど反響を呼ばなかった。

当時すでに南スラヴの諸民族はそれぞれ独自に民族形成の過程を歩みつつあった。スロヴェニア人はクロアチア人と同様に民族的な覚醒の時期にあり、スロヴェニア語の文章語の体系化をおこない、民族意識を強めていた。セルビア人は二度の蜂起を経て、トルコから自治公国の地位を獲得していた（1830年）。セルビアの指導者の関心は、その領土を守り、いかに拡大していくかにあった<sup>8</sup>。1843年にウィーン政府は、ハンガリーの圧力のもとで「イリリア」の名称を使用することを禁じ、イリリア運動の抑圧を開始した。諸民族の春と呼ばれた1848年革命の挫折後、ウィーン政府は専制主義的な中央集権化を進めてクロアチアの自治を抑制し、イリリア運動は消滅した。

1860年代になって、イリリア運動の洗礼を受けたクロアチアの政治指導者の中には、南スラヴ統一主義をより明確な政治プログラムとして主張する者が現れた。その中心人物がヨシプ・ユーライ・シュトロスマイエル神父であった<sup>9</sup>。

初期のイリリア主義者は南スラヴ人の共通性だけに注目し、各民族の違いには関心が薄かった。これに対して、シュトロスマイエルは、南スラヴの諸民族はすでに独自に民族形成を始めているという事実を自覚していた。彼はそれぞれの民族の独自性を承認し、すべての南スラヴ人（そこにはブルガリア人も含まれていた）を、ユーゴスラヴィアという独立で自由な国家的・民族的な共同体に統合することを究極的な目標とした<sup>10</sup>。この共同体は、それぞれの民族を完全な対等・同権のもとにおき、各民族の支配地域に国家としての自立性と自治権を保証する連邦制国家である。もちろんこのような国家は一気に実現するものではない。それは段階的に実現していくものと考えられた。

シュトロスマイエルは次の三段階を想定していた。第一段階は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の内部で、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人の政治単位を形成する。これはスロヴェニア、クロアチア、ヴォイヴォディナを自治単位として確立するということである。第二段階は、帝国内部の南スラヴ人の政治単位を統合し、オーストリアやハンガリーと対等・同権の第三の国家を形成することである。これは二重帝国を三重帝国に再編することである。第三段階は、オーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊後に、旧帝国内の南スラヴ人国家と、他の南スラヴ人の諸国家とが対等・同権の原則で合同国家を形成す

る。つまり、連邦国家としてのユーゴスラヴィアを形成することである<sup>11</sup>。

このような国家構想をシュトロスマイエルが抱いたのはなぜか。南スラヴ統一主義をクロアチア人が唱道した理由とも重なるが、二つの点を指摘しておきたい。一つは、クロアチア人の悲願は帝国内で分割支配されていたクロアチア諸地域の統一であったが、ハプスブルク帝国の国家制度の再編成と自治権回復に対するクロアチア人の期待はたびたび裏切られ、オーストリアやハンガリーに対してシュトロスマイエルが深い不信感を抱いていたことである<sup>12</sup>。もう一つは、当時の国際関係や帝国内の力関係からみて、クロアチア人の力だけでは有効な政治運動が困難であったことである。クロアチアの再統一を達成するためには、クロアチア人は、スロヴェニア人やセルビア人と共同戦線を組織することが必要である。このように南スラヴ統一主義を信奉する人びとは考えた<sup>13</sup>。とくにセルビア人との共闘は不可欠であった。その場合、セルビア公国（1878年以降セルビア王国）との連携も視野にあったが、それ以上に重要であったのはクロアチアに居住するセルビア人の協力を得ることである<sup>14</sup>。クロアチア人とセルビア人とが対立している限り、クロアチア人の政治的影響力は限られたものであったからである。

ところが、1870年代から20世紀の初めまで、クロアチアにおけるクロアチア人とセルビア人の民族間関係は良くなかった<sup>15</sup>。1883年から1903年まで総督を務めたマジャール人のクエン＝ヘーデルヴァーリは、クロアチア人とセルビア人との敵対感情をかきたてることをクロアチア統治の一手段とした<sup>16</sup>ため、両民族の対立はいっそう深まった<sup>17</sup>。クロアチア人の政治勢力も分裂し、対立を続けていた<sup>18</sup>。

クロアチアの民族運動は長らく手詰まり状態に陥ったが、世紀末から20世紀にかけてクロアチア人とセルビア人との関係には好転の兆しが見え始めた<sup>19</sup>。新世代のクロアチア人政治家の中には新たな戦略で政治的閉塞状況を打開しようとする者たちが現れた。アンテ・トルムビッチとフラーノ・スーピロを中心とするダルマチアのクロアチア人政治集団がそうである<sup>20</sup>。彼らの政策は「新路線」と呼ばれる。それは、まずクロアチア人とセルビア人との政治的同盟関係を構築し、さらにこれを反ドイツ・オーストリアの点で一致する、その他の南

スラヴ人、イタリア人、マジャール人などハプスブルク帝国内の諸民族の政治勢力との合従連衡に発展させ、相互利益を追求する中で、クロアチア人の政治的要求を実現しようとするものであった<sup>21</sup>。

1905年10月、トルムビッチらの招集により、クロアチア、ダルマチアおよびイストラの主要なクロアチア人政党の代表はアドリア海に面する港町リエーカで会議を開き、リエーカ決議と呼ばれる政治宣言を採択した。決議は、ダルマチアをクロアチアおよびスラヴォニアを統合することを条件に、マジャール(=ハンガリー)人の国権拡大闘争を支持し、同時に政治的自由の実現のための諸改革の実施<sup>22</sup>を要求した。この直後にダルマチアおよびクロアチア議会のセルビア人議員もザダルで集会をもち、リエーカ決議と同様にマジャール人の国権闘争を支持し、クロアチア人がセルビア人を対等に処遇することを条件に、ダルマチアとクロアチアおよびスラヴォニアとの再統一を支持するザダル決議を発表した。ダルマチアで成立したクロアチア人とセルビア人との政治的連携は直ちにクロアチアに波及した。その年の12月には5つの政党が合流合体して、「クロアチア人・セルビア人連合」という歴史上画期的な統一戦線を結成した。

クロアチア人とセルビア人との政治的な統一行動が急速に進展した1904年から1905年は、ハプスブルク帝国が支配民族間の争いで大きく揺れ動いていた時期であった。帝国の東半分を占めるハンガリーで、オーストリアとの国家連合協定(アウスグライヒ)の修正を求めるマジャール人野党連合が勢力を拡大し、ウィーンの皇帝に国権拡大の要求を突きつけていたのである<sup>23</sup>。スーピロやトルムビッチらは予想されるウィーンとブダペストとの衝突を、ダルマチアとクロアチアとの統合のために利用できるのではないかと考えた。1905年の春、「新路線」に対する理解と支持を求めて、スーピロとトルムビッチはブダペストでマジャール人反対勢力の指導者と相次いで会談した<sup>24</sup>。スーピロはベオグラードを訪問し、セルビア王国の政府要人と政治家に接触した。リエーカ決議の直前の1905年9月には、ハンガリー議会の議長がリエーカを訪れ、トルムビッチおよびスーピロと会談した。スーピロとトルムビッチは、これまで敵対していたマジャール人とセルビア人とを同盟者に変えることで、クロアチアの人々の歴

史的悲願であるダルマチアとクロアチアおよびスラヴォニアとの再統一を実現させるといふ戦略を描いた。マジャール人の国権拡大闘争に対して、クロアチア再統一の承認を条件にリエーカ決議が支持を表明しているのはこのためである。

「クロアチア人・セルビア人連合」は1906年5月の選挙で躍進し、クロアチア政治の中心的勢力になった<sup>25</sup>。だがこのとき「新路線」はすでに実現可能性を失っていた。皇帝と妥協して政権の座に就いたマジャール人反対勢力は<sup>26</sup>、オーストリアと一体となって非マジャール人に対する支配を維持する方向に政策転換したためである<sup>27</sup>。結局、彼らが「連合」に約束した事項は何一つ実現しなかった。1907年にハンガリー政府がクロアチアに対してマジャール化政策を復活させたことにより、マジャール人反対勢力に対する期待は決定的に裏切られて、「新路線」は挫折した<sup>28</sup>。もっとも、「クロアチア人・セルビア人連合」は崩壊しなかったため、ハンガリー政府はクロアチア人とセルビア人とを離反させようと策謀した<sup>29</sup>。これはかえって両民族を結束させ、ハンガリーとオーストリアに対する反感を助長する方向に作用した。

その後、クロアチアの民族運動は再び手詰まり状態になった<sup>30</sup>が、国際情勢に大きな変化が生じた。1912年と1913年のバルカン戦争でセルビアが勝利を収め、領土を倍増させた。南スラヴ人解放の旗手としてセルビアは躍進したが、セルビアの民族主義と膨張主義の高揚は、多くのセルビア人を内部に抱え込むオーストリア＝ハンガリーとの緊張関係を一気に高めた。1914年7月、オーストリア＝ハンガリーはセルビアに宣戦布告し、これを契機に第一次世界大戦が勃発した。南スラヴ人の運命はこの戦争の帰趨に委ねられることになったのである。

### 3 ユーゴスラヴィア委員会の結成

ユーゴスラヴィア委員会は、第一次世界大戦中にオーストリア＝ハンガリーから政治亡命した一群のクロアチア人、スロヴェニア人、セルビア人が結成した政治組織である。彼らは、オーストリア＝ハンガリー支配下の南スラヴ人を

解放し、セルビアおよびモンテネグロと統一国家をつくることを目的に連合国の間で情報宣伝活動をおこない、戦後の統一国家形成に大きく貢献した。

委員会の創設時にイニシアチブをとったのは、アンテ・トルムビッチ、フラーノ・スーピロ、イワン・メシュトロヴィッチ<sup>31</sup>といった南スラヴ統一主義を政治信条とするクロアチア人である。トルムビッチらは、ハプスブルク帝国の再編に見切りをつけ、帝国内の南スラヴ人諸地域を帝国から解放し、セルビアおよびモンテネグロと統合国家を形成することに運動の目標を転換していた。そのため、オーストリア＝ハンガリーとセルビアとの戦争が始まるとすぐに、政府の弾圧を恐れて隣国のイタリアに政治亡命した<sup>32</sup>。ところがそこで彼らは、南スラヴ人、とくにクロアチア人の居住地に対してイタリアが強烈な領土野心を抱いていることを知った。

イタリアは、ドイツおよびオーストリア＝ハンガリーと同盟関係を結んでいたが、第一次世界大戦が始まると、あえて中立を宣言した。その目的は、双方の陣営と交渉し、より有利な参戦条件を引き出すことにあった。イタリアは、ローマ帝国の遺跡が散在し、またヴェネチアが長く支配していた東アドリア海沿岸部（イストラ、ダルマチアおよびその島嶼部）と、南チロルおよびトレンティノの領有を強く欲していた。これらの地域はオーストリアの領土であり、中央同盟側（ドイツとオーストリア＝ハンガリー）はその割譲に同意する意志はなかったが、協商国側（イギリス、フランス、ロシア）にとっては敵国の領土であり、イタリアの要求を認める構えを示していた。イタリアでは、東アドリア海沿岸部は「未回収の領土」であると新聞が書き立て、その獲得を条件にイタリアは協商国の側に立って参戦すべきであるという主張が強まっていた<sup>33</sup>。

こうした動きに強い懸念を抱いたトルムビッチ、スーピロ、メシュトロヴィッチの三人は、ローマのセルビア大使の仲介により、1914年9月末にフランス、イギリス、ロシアの大使館を訪れた。その目的は、イタリアが欲している東アドリア海沿岸部は南スラヴ人の歴史的な居住地であることを知らせ、イタリアへの割譲の阻止を要望することであった。この機会に、三人は、オーストリア＝ハンガリー内のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は、オーストリアとハンガリーの支配から解放され、セルビアおよびモンテネグロと統合国家

を形成することを望んでいると協商国に伝えた。彼らの要望に対して、フランス、ロシアの外交官は慎重で冷淡であった<sup>34</sup>。

この訪問時に、フランスとイタリアの外交筋は、戦後処理構想として、オーストリア＝ハンガリーの中にクロアチア人とスロヴェニア人の自治国家ないし自由国家をつくることを一案として検討している<sup>35</sup>ことを彼らは知った。その構想は、オーストリア＝ハンガリーの解体後に南スラヴ人の統一国家を建設するという彼らの考えとは相反するものであった。そこで南スラヴ人の領土を保全し、セルビアおよびモンテネグロとの統一国家の樹立すること目的として、オーストリア＝ハンガリー出身の亡命者で運動組織をつくり、協商国とセルビアの双方に働きかけることを彼らは計画した<sup>36</sup>。

トルムビッチらはセルビア政府に協力を要請した。セルビア政府首相のニコラ・パシッチはトルムビッチらの提案をセルビアの国益にかなうと判断し、彼らの運動を支援することを決めた。1914年11月22日、セルビア政府の代表<sup>37</sup>とトルムビッチらはフィレンツェで会合し、ユーゴスラヴィア委員会の創設を合意した<sup>38</sup>。ただしこのとき集まったメンバーは主としてダルマチア出身のクロアチア人であり、「ユーゴスラヴィア委員会」を名乗ることには無理があった。トルムビッチの提案により、ユーゴスラヴィア委員会の正式な発足は、クロアチア、イストラ、スロヴェニアの代表がそろってからにすることにした。この直後の1914年12月セルビア政府はセルビアの戦争目的に関する声明（ニーシュ宣言）を発表し、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の解放とセルビアへの統合のためにセルビアは中央同盟側と戦うことを正式に表明した。

セルビア政府との合意のあと、トルムビッチら亡命者集団は直ちに実質的な活動を開始した。1915年初めには、「アドリア部隊」と名付けられた独自の部隊に対する志願者の募集を始め、この部隊は連合国の側に立って戦った。またメンバーを派遣して北アメリカおよび南アメリカに移民していた南スラヴ人を政治的に組織することを試みた。アメリカ合衆国には40万人のクロアチア人と20万人のセルビア人が移住しており、その支持を取り付けることは大きな意義があった<sup>39</sup>。他方トルムビッチらはクロアチアおよびスロヴェニアの政党とも接触し、メンバーの派遣を要請した<sup>40</sup>。フリートユング事件<sup>41</sup>の報道で有名になって

いたフランコ・スーピロはその知名度を生かして、協商国の知識人、ジャーナリストグループおよび政府関係者に支持を働きかけた<sup>42</sup>。

1915年の初め、協商国とイタリアとの参戦交渉は最終局面を迎えていた。イギリスとフランスは、イタリアを協商国の陣営に引き入れるため、その領土要求を認めることは確実とみられ、トルムビッチらは、同じスラヴ人のロシアがこれに反対してくれることに一縷の望みを託していた。1915年3月スーピロはペテルスブルクを訪問し、ロシア政府にイタリアの要求を支持しないように最後の働きかけをおこなったが、協商国とイタリアとの協定内容はすでに固まっていた。ロシアもイギリスとフランスに同調することを決めており、ロシアの外相サゾノフはスーピロの要請をきっぱりと拒否した<sup>43</sup>。

イタリアと、イギリス、フランス、ロシアとの間で結ばれた秘密協定は、ロンドン条約と呼ばれ、1915年4月26日に正式に調印された。それは、イタリアが協商国の側に立って参戦することと引き替えに、オーストリア＝ハンガリーの領土の割譲を3つの条項でイタリアに約束した<sup>44</sup>。(1)トレンティナ、ブレンナー峠以南の南チロル地方全域、(2)トリエステ、ゴリツィア、グラディツァ、カルニオーラおよびカリンツィアの一部、(3)北ダルマチアおよびその島嶼部。このうち(2)には、50万人のスロヴェニア人とクロアチア人が、(3)には50万人のクロアチア人が居住していた<sup>45</sup>。

スーピロからの報告を受けて<sup>46</sup>、トルムビッチは、ユーゴスラヴィア委員会の結成準備を急いだ。イタリアはもはや政治活動の場にするには不都合になったので、彼らはローマを離れ、パリに向かった。1915年4月30日、オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人を代表する機関としてユーゴスラヴィア委員会が正式に発足した。最初のメンバーは18人であり、トルムビッチが議長に就任した。委員会の目的は次の三点に集約された。(1)ハプスブルク帝国を解体し、オーストリア＝ハンガリーの支配にある南スラヴ人を解放すること、(2)クロアチアとスロヴェニアの領土の割譲をイタリアに約束したロンドン条約第2条と第3条の適用を阻止すること、(3)オーストリア＝ハンガリーの支配にあった南スラヴ人とセルビアおよびモンテネグロとを対等の条件で単一の国家に統合すること<sup>47</sup>。

ユーゴスラヴィア委員会はまもなくロンドンに本部を設置した。ロンドンには連合国<sup>48</sup>の政治外交上の本部があったからである。このあと委員会は、パリ、ジュネーブ、ペテルスブルク、ワシントンに事務所を開いた。委員会は、当初セルビア政府に財政的に依存していたが、アメリカに移住していた南スラヴ人を組織することに成功し、活動資金の基盤を得た。こうしてユーゴスラヴィア委員会は、外交チャンネルの上でも財政基盤の上でもセルビア政府から独立した活動を行う組織になった。

ここで改めて整理すると、ユーゴスラヴィア委員会が目標とした南スラヴ人統一国家の実現には二つの条件が満たされる必要があった。一つはオーストリア＝ハンガリーが解体することであり、もう一つはその支配下にあった南スラヴ人の居住地域とセルビアおよびモンテネグロとの統合が実現することである。モンテネグロはセルビアにとってはいわば同族国家であり、セルビアと行動をともにすることは容易に予測された。セルビアはニーシュ宣言で南スラヴ人統一国家の形成を宣言し、この点では第二の条件は満たされる見込みがあった。しかし、それが具体的にどのような国家になるのかをセルビア政府は明確に示していなかった。したがって、トルムビッチらにとっては、第一にオーストリア＝ハンガリーの将来に対して連合国がどのような方針で臨むかということと、第二にセルビアがどのような統一国家の構想をもっているのかが決定的に重要であった。

第一の点では連合国の戦後構想は彼らの運動にとって圧倒的に不利であった。19世紀後半以降ヨーロッパの国際秩序は、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア＝ハンガリー、ロシアのバランスによって維持されてきた。連合国は戦後にもこの五大列強による勢力均衡のシステムを維持しようと考えていた。それゆえ、連合国は、オースト＝ハンガリー二重帝国の解体を戦争目的にしていなかった。ただその領土を縮小させ、連合国の要求を満足させればよいと考えていただけであった。

個別にみると、当時のイギリスにとって最大の脅威はドイツの強大化であった。イギリスは、ドイツを牽制し、その南方進出を抑える役割を戦後のオーストリア＝ハンガリーに与えようとしていた。それゆえ、オーストリア＝ハンガ

リーの解体をイギリスは望まなかった。フランスにとってもドイツは危険な宿敵であった。フランスはドイツと直接国境を接する国であり、しかも 1871 年の普仏戦争の敗北によりアルザスとロレーヌの二州をドイツに奪われていた。したがって、フランスの最大の関心事は領土の奪回と、ドイツが将来再び強大になることを阻止することであった。そのため、戦後にはヨーロッパの勢力均衡維持のためにオーストリア＝ハンガリーを残しておこうと考えていた。イギリスとフランスには、オーストリア＝ハンガリーを解体させると、その内部のオーストリア・ドイツがドイツと合体して「大ドイツ」国が出現する可能性があることを危惧した。ロシアもまたドイツの脅威に対する対策としてオーストリア＝ハンガリーの存続を支持していた。ロシアはオーストリア＝ハンガリーを、オーストリア、チェコ、ハンガリーの三重君主国に再編する戦後構想をもっていた。ただこの案はセルビアの要求に配慮し、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナとダルマチアをセルビアに併合することを含んでいた。イタリアもオーストリア＝ハンガリーの領土を縮小し、自国の領土要求を満たすことが最大の目的であり、オーストリア＝ハンガリーを解体することまで望んではなかった<sup>49</sup>。

第二の点である南スラヴ人統一国家に対するセルビアの態度も、ユーゴスラヴィア委員会にとって大きな問題であった。

セルビアではニコラ・パシッチが率いる急進党が政権を担当していた。セルビア民族主義者として知られるパシッチは、対外的には親ロシア・反オーストリア＝ハンガリーの外交路線をとり、国外のセルビア人居住地域を段階的に吸収・統合し、バルカン半島にオーストリア＝ハンガリーに対抗できるような大セルビア帝国の実現を目標に膨張政策を遂行していた。彼は政府首相として 1912 年と 1913 年のバルカン戦争を指導し、領土の倍増に成功した。セルビアの主要な野党勢力（進歩党と独立急進党）も、全セルビア人のセルビア国家への統合を目標とする点では一致していた。

セルビアの民族主義的な指導者は、イタリアの国家統一運動（リソルジメント）にも強い刺激を受け、セルビアを「南スラヴ世界のピエモンテ」に見立てていた。ピエモンテとは 1861 年のイタリア統一を指導したサルデーニャの王家サヴォイア家の領地であり、統一運動の根拠地となった地域である。つまり、

サルデーニャ王国が他の諸国を併合する形でイタリアの統一が実現したように、南スラヴ人諸地域の統一はセルビア王国が中心となり、他の諸地域を併合することによって実現するというのが主要な政治家、青年運動の指導者、将校団、知識人に共有されたシナリオであった。この考えはバルカン戦争でのセルビア軍の大勝利によっていっそう強まった<sup>50</sup>。したがって、セルビアでは、南スラヴ人諸地域の統合を求める気運は高まっていたものの、クロアチア人やスロヴェニア人と共闘して合同国家を創設しようとする考え方に対する支持は弱かった<sup>51</sup>。

第一次世界大戦の初期、パシッチとセルビア政府は戦後の国家構想について二つの案を持っていた。一つは、ニーシュ宣言が述べる、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を単一国家に統合する南スラヴ統一国家案である。もっとも、オーストリア＝ハンガリー帝国を解体する考えは連合国にはなかったため、パシッチはこの構想の実現性を低くみていた。セルビア政府が表向き全南スラヴ人の解放とセルビアへの統合を戦争目的として発表したのは、主として戦術的な理由からであった<sup>52</sup>。もう一つは、オーストリア＝ハンガリー内のセルビア人居住地だけをセルビアに合体して大セルビア国家を実現する案である。この国家には、セルビアおよびモンテネグロに加えて、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ、クロアチアの一部（ダルマチアとスラヴォニア）、およびヴォイヴォディナが入る。この案はいうまでもなくセルビア国家の歴史的使命を実現する案である。しかも、オーストリア＝ハンガリー帝国が完全に解体する見込みがなかった段階では、こちらの構想により大きな実現性があるとパシッチはみていた。しかし、万一の場合に備えて、セルビアが指導する南スラヴ人統一国家の形成という選択肢も視野に入れていた。

セルビア政府がニーシュ宣言で全南スラヴ人の解放と統合を内外に表明したことを、トルムビッチらは当初、肯定的に受け止めた。ただしすでに述べたように、この宣言はどのような統一国家を戦後に形成するのかを具体的に述べていなかった。トルムビッチもこのことに気がついてしたが、ひとまずは彼らの構想にセルビア政府が乗ってきたものと解釈した<sup>53</sup>。だが、その理解の誤りが判明するのに時間はかからなかった。

#### 4 スーピロとセルビア政府およびユーゴスラヴィア委員会の対立

1915年8月、ユーゴスラヴィア委員会に重大な情報が入った。それはセルビアと連合国とが進めていた秘密交渉に関するものだった<sup>54</sup>。イギリス、フランス、ロシアの代表がパシッチに提示していた共同提案は、バルカン戦争でセルビアが獲得したマケドニアの一部をブルガリアに譲渡させる代わりに、オーストリア＝ハンガリーの領土の中から、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ、スラヴォニア、バチカ（ヴォイヴォディナ）、南ダルマチアの一部地域の割譲をセルビアに約束するという内容を含んでいた。クロアチアの地位に関する決定は将来の和平会議まで棚上げとされた。連合国は、ロンドン条約で東アドリア海沿岸部の大半をイタリアに約束し、残余のクロアチアの領土を、ハンガリーを敵側から引き離す交渉の材料にその領土を使う意図があったから、クロアチアは戦後にイタリア、セルビア、ハンガリーによって三分割される可能性があった。

こうした情勢にもっとも大きな危機感を抱いたのはスーピロであった。彼は、連合国の政府関係者や政治家と精力的に接触し、このような協定が締結されることを阻止しようと運動した。1915年9月、スーピロは、イギリス外相グレイに宛てて7項目の覚書を送った<sup>55</sup>。そのなかでスーピロは、次のような見解を示した。南スラヴ人の統一国家は諸民族の政治的対等・平等の原則に基づいて形成されるべきである。セルビア国家が拡大される形で統一国家が形成されるならば、南スラヴ統一主義の主唱者としてセルビアはこの国家の政治的・憲法的な改革を行う必要がある。もしそのような改革をセルビアが実行しないならば、クロアチア人とスロヴェニア人は、セルビアによる解放と統合をもはや望まない。クロアチア人はクロアチア国家を形成し、オーストリア＝ハンガリー帝国内の諸地域のうち、クロアチアとの統合を望む地域をこれに統合する。

スーピロはトルムビッチに相談せずにこの覚書を出した。イギリスの外交関係者はこれをユーゴスラヴィア委員会の見解であるとみなしたので、トルムビッチを始めユーゴスラヴィア委員会のメンバーはスーピロの行為を単独行動と

して批判した。覚書の内容もメンバーの間で物議を醸した。スーピロをクロアチア分離主義の運動家と非難する者もいた。しかし、スーピロとユーゴスラヴィア委員会のメンバーとの間の摩擦は、スーピロがメンバーと意見調整をしなかったことだけでなく、南スラヴ統一国家の形成をめぐる戦術的な問題に根ざっていた。

このときスーピロとユーゴスラヴィア委員会を悩ませていたのは、南スラヴ統一国家構想に対するセルビアの態度であった。第一に、ニーシュ宣言で南スラヴ人の解放と統合を公約したにもかかわらず、セルビア政府は南スラヴ人統一国家の実現に本腰で取り組む構えを示さなかった。むしろ実際の行動では、クロアチア人やスロヴェニア人を犠牲にしてセルビア人の統合国家を優先的に実現させるという姿勢を垣間見せていた。ロンドン条約に対する受動的な態度や連合国との領土取引の交渉はその好例である。このことの背景には、南スラヴ人の統合プロセスに関して、パシッチとセルビア政府がユーゴスラヴィア委員会とは異なった考えをもっていたことがある。ユーゴスラヴィア委員会が南スラヴ人統一国家を一気に立ち上げることを考えていたのに対して、パシッチらは、南スラヴ人の統合を段階的に実現させる構想をもっていた。セルビアにとっては全セルビア人の統合が優先課題であり、スロヴェニア人やクロアチア人を含めた全南スラヴ人の統合はその次の段階の課題であった。

第二に、南スラヴ人統一国家の中身についても、セルビア政府はユーゴスラヴィア委員会とはまったく異なる考えをもっていた。パシッチは、トルムビッチやスーピロがそう考えたように、統一国家の中でオーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人諸地域がセルビアにとって対等なパートナーになるとは毛頭考えていなかった。パシッチにとって、南スラヴ人の解放と統合の唯一の主体はセルビアである<sup>56</sup>。オーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人はセルビアによって解放される受動的な存在である。彼にとって、戦後に実現する国家は、どのような領土と民族を含むものになってもセルビアの拡大であった。

早くからセルビア政府の関係者と接触していたスーピロは、このようなセルビア指導部の考え方を察知していた。このまま無条件にセルビアとの統合が進めば、オーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人諸地域はセルビアに呑み込まれ、

セルビアが支配権をもつ国家ができあがる。これではオーストリア＝ハンガリーからセルビアに支配権が移行するだけのことであり、クロアチア人やスロヴェニア人の民族的解放は実現しない。このような事態を回避するには、ユーゴスラヴィア委員会は、統一国家の実現に先立って、その国家の形成手順や国家の内部構造をセルビア政府と明確に取り決めておかなければならない。もしセルビアがこれに応じないようなら、クロアチアは独自の国家の樹立をめざした方がよい。これがスーピロの見解の骨子であった<sup>57</sup>。

しかし、スーピロの考えと警告は委員会の中では支持を得られなかった。メンバーの多くは、南スラヴ人統一国家の実現に向けてセルビアが行動を開始していない段階で、統一国家の中身の問題を提起するのは得策でないと考えていた。トルムビッチらクロアチア人グループは、スーピロと同様に統一国家の中ではクロアチアの自治権が尊重されることが不可欠だと考えていたが、彼らはこのような問題を提起するのは時期尚早であるとみていた。連合国と中央同盟との戦いは膠着状態が続いていた<sup>58</sup>。連合国側の内部ではオーストリア＝ハンガリーと単独休戦し、これを戦線から離脱させる案も浮上し、イタリアがこれを推進しようとしていた<sup>59</sup>。もしそれが実現すれば、オーストリア＝ハンガリーの存続が確定し、南スラヴ人統一国家の可能性はなくなる。このような状況でセルビアが統一国家構想に背を向けてしまえば、ユーゴスラヴィア委員会の運動は前途に光明を失う。したがって、トルムビッチらは、統一国家の中身の問題はひとまず棚上げにして、南スラヴ人統一国家の実現に向けてセルビアが本腰で行動を開始するよう働きかけることを最優先の課題としたのである<sup>60</sup>。そのため、統一国家の形成手順や国家制度をめぐる議論はセルビア政府に提起されなかっただけでなく、委員会の内部でも先送りにされた。

1916年2月、ユーゴスラヴィア委員会はパリで総会を開き、委員会の基本構想と今後の政策について議論した。スーピロはきっぱりと意見を述べた。彼は、セルビア政府の姿勢を批判して、南スラヴ人統一国家の実現を連合国に一向に働きかけていないと述べ、それどころかセルビア政府が連合国と領土補償を取引したため、クロアチアが領土分割の危機にさらされていること指摘した。もしセルビアがこのような態度を改めず、対等な立場での統合を受け入れないな

らば、クロアチアは独立のクロアチア国家の実現に向けて行動を始める以外に方策はないとスーピロは述べた。これに対して、セルビア人のメンバーはスーピロを攻撃し、スロヴェニア人メンバーもこれに同調した<sup>61</sup>。

総会での議論は、スーピロが「覚書」で提起した問題にではなく、スーピロ個人に向けられた。トルムビッチは状況を鎮静化するため、セルビア政府のとする「段階的統合」の方針に議論を向けた。セルビア政府が、全セルビア人の統合を優先し、クロアチア人やスロヴェニア人の統合をその次の課題と考えていることに批判を求めたのである。トルムビッチは、ユーゴスラヴィア委員会の政策は、狭い意味でのセルビア主義ではありえず、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の対等・平等を志向するユーゴスラヴィア主義であることを述べ、したがって、統合はセルビアだけの問題ではなく、全南スラヴ人の問題であることを指摘した。こうしてトルムビッチは争点を原則的問題に向けた<sup>62</sup>。

1916年2月24日に委員会が採択した決議は、全南スラヴ人の統一国家の形成が基本問題であること、ロンドン条約はセルビアとクロアチアを切り離すことを予定している条項があるので、この条項を破棄し、クロアチアにセルビアとの合同の権利を認めるようユーゴスラヴィア委員会は全力を尽くすことを確認した。決議はまた、連合国は戦争目的の中でセルビアの再建にしか言及していないので、セルビアの犠牲に対する補償はセルビアの再建ではなく、南スラヴ人問題の公正な解決でなければならないことを強調した<sup>63</sup>。

この決議は、スーピロが「覚書」で議論したように、セルビアとの統合構想そのものを問題にしなかった。ただし、スーピロのセルビア政府批判によって、委員会はクロアチア問題について踏み込んだ議論を行い、その結果まとめられた決議はクロアチア問題が南スラヴ人問題の一部であることを明確に認めた。しかし、スーピロは総会の決議にもトルムビッチの態度にも不満であった。統合の手順と国家制度をセルビアと事前に取り決めること、それができないならクロアチアは独自の国家をめざすべきだというスーピロの提案は事実上却下されたからである。しかもスーピロを念頭に置いて、トルムビッチはメンバーの単独行動を禁ずる決定を下したので、両者の関係は冷却化した<sup>64</sup>。

南スラヴ人統一国家の必要性という点で両者に見解の相違はなかった。相違

は将来の国家においてクロアチアの地位をどう確保するかであった。トルムビッチは、現下の状況ではセルビアを動かして全南スラヴ人の統一国家の即座の実現に同意させることが第一の課題であり、そのあとで国家制度の問題、つまりクロアチアの地位を議論すべきであると考えた。これに対して、スーピロは、クロアチアの地位の問題は統一国家の実現に先立って解決しておかなければならないと考えた。スーピロはユーゴスラヴィア委員会の中に「クロアチア委員会」を創設することすら提案した。しかし、それは南スラヴ人統合の事業からセルビアを遠ざけ、イタリアの立場を利するだけだという理由からトルムビッチは拒否した<sup>65</sup>。

1916年4月、イギリスの日刊紙がセルビア首相パシッチのインタビュー記事を掲載した。そこでパシッチは、マケドニアを譲るくらいならオーストリア＝ハンガリーの領土を少なくもらう方をセルビアは選択するとか、アドリア海でのイタリアの覇権を容認することはセルビアとイタリア双方の利益にかなうという発言をしていた。この記事を直ちにイタリアの新聞が転載して、反ユーゴスラヴィア委員会の宣伝に使用したため、委員会のメンバーに衝撃が走った。スーピロは激高した。セルビアの政策とは絶縁するべきだと彼は考えた。1916年5月末に新しい総会が開催された。スーピロはセルビア政府との関係を見直すこと、そしてパシッチの発言を議題にすることを求めた。しかし、セルビア人のメンバー（ニコラ・ストヤノヴィッチとドゥシャン・ワシリエヴィチ）はパシッチの発言に対する非難を鎮め、スーピロの行動に対する議論を喚起しようとした。ユーゴスラヴィア委員会のメンバーの間には激しい議論が起こり、持論に固執したスーピロは孤立した。結局、6月5日にスーピロは、活動の自由を得るため、委員会の脱退を表明した<sup>66</sup>。

## 5 1917年の転機：「五月宣言」と「コルフ宣言」

連合国およびセルビアの戦後構想の帰趨とならんで、ユーゴスラヴィア委員会にとって重要であったのは、オーストリア＝ハンガリー帝国内の南スラヴ人

の政治勢力が南スラヴ統一国家構想に対してどのような態度をとるかであった。ユーゴスラヴィア委員会は帝国内の南スラヴ人を代表する国外の組織であることを標榜したが、それは亡命政府のように国内の政治意志を正式に代表する機関ではなかった。ユーゴスラヴィア委員会はロビイスト集団と見なされても仕方がない状況にあった。トルムビッチらはこうした弱点を十分に認識していた。したがって、彼らは、帝国内の南スラヴ人の政治家に対して、ユーゴスラヴィア委員会の活動を支持し、帝国内の南スラヴ人がオーストリア＝ハンガリーの支配からの解放とセルビアとの統合国家の形成を望んでいることを示すように訴えていた。しかし、ユーゴスラヴィア委員会は国内の政治勢力と直接的な関係を欠いており、その存在や訴えは十分には知られていなかった。

帝国内の南スラヴ人の政治勢力は、むしろトルムビッチらの期待とは反対の動きを示した。開戦時<sup>67</sup>、クロアチア議会で最大多数を占めた勢力は「クロアチア人・セルビア人連合」であり、その指導権はスヴェトザール・プリビーチェヴィッチを中心とするセルビア人グループが握っていた。サラエヴォでセルビア人青年に暗殺されたオーストリア皇太子フェルディナンドは、帝国内でのハンガリーの強大化に反感を持ち、クロアチア王国の復活を意味するハプスブルク帝国の三重帝政化案を支持しているとみられていた。フェルディナンドの皇帝就任を待望するクロアチア人は多く、そのためその暗殺直後には反セルビア人感情がクロアチア人の間に広がった。議会では、親オーストリアの一派が、セルビア人グループが指導する「連合」を激しく攻撃した。「連合」は自己保身のため、ハンガリー政府にいっそう忠実に追従し、二重帝政を支持する路線の選択に追いやられた。一方、クロアチアの野党勢力は、スロヴェニアの聖職者グループとともに、三重帝政化構想による帝国の再編に望みをつないでいた。したがって、オーストリア＝ハンガリー内の主要な南スラヴ人政治勢力は、その思惑に違いはあるものの、戦争初期には帝国の枠組みを維持する志向では一致していた<sup>68</sup>。

しかし、大戦開始後4年目になる1917年になると、ユーゴスラヴィア委員会の運動に大きな転機が訪れた。これまで委員会との協議を頑なに拒否してきたセルビア政府首相のパシッチが、南スラヴ人の統一国家の形成について交渉に

応じる意向を伝えてきたからである。1917年3月にパシッチは、側近のストヤン・プロチッチを介して、トルムビッチと接触を始め、4月末に正式の招待状を送った。ユーゴスラヴィア委員会の代表とセルビア政府代表との協議は、セルビア政府が臨時に拠点としていたコルフ島で開催されることになった<sup>69</sup>。

パシッチの態度が変わった背景には国際関係の変化がある。最大の要因はロシア革命による帝政の崩壊である。パシッチの外交政策は、セルビアの要求を帝政ロシアが支持することを前提にして展開されてきた。帝政の崩壊は、大セルビア構想が最大の後ろ盾を失ったことを意味した<sup>70</sup>。もっぱらロシアに依存してきたパシッチは、それ以外の諸国とは関係が薄く、イギリス政府要人とは冷淡な関係にあった。第二にアメリカの参戦である。アメリカは、オーストリア＝ハンガリーの領土の割譲をセルビアに約束したロンドン条約の締結者ではなかったため、今後の出方次第ではセルビアの領土要求の実現は困難になる可能性があった<sup>71</sup>。加えて、セルビアは軍事的劣勢が続き、政権内部の抗争<sup>72</sup>によってパシッチは威信を低下させていた。このような状況のもとで、連合国が戦後構想を変更し、南スラヴ人の統一国家を承認する方針を打ち出すことも考えられた<sup>73</sup>。パシッチは、こうした場合に備えて、セルビアの権益を確保する手を打っておく必要があった。委員会との協議はその布石であり、南スラヴ統一国家構想に対しても受け入れの意思があることを示すデモンストレーションであった。

ところで、コルフ会談が本決まりになってまもなく、ユーゴスラヴィア委員会を当惑させるような事件がオーストリア＝ハンガリー内で起こった。帝国議会の南スラヴ人代議員がユーゴスラヴィア・クラブを結成し、帝国の枠内に南スラヴ人の統合国家を要求する声明(「五月宣言」)を出したことである<sup>74</sup>。カール皇帝は国民に宥和の姿勢を示すため、大戦開始以来閉鎖していた議会を5月30日に開いたが、その壇上でクラブ代表のスロヴェニア人アントン・コロシェッツは、次のような声明を読み上げた。「ユーゴスラヴィア・クラブに結集する議員は、民族の原則とクロアチアの国権に基づいて、スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人が居住する帝国の全領地を、民主的な基礎に基づいて構成され、あらゆる外国の支配から自由な独立国家機構に統合し、これをハブスブ

ルク王朝の支配のもとにおくことを要求し、その実現のために全力を尽くす」<sup>75</sup>。

この声明には二つの要素がある。一つは、南スラヴ人の統合国家の樹立を帝国内の南スラヴ人の民意を代表する有力な政治家が要求したことである。もう一つは、この国家は「ハプスブルク王朝の支配のもとにおく」という語句が示すように、帝国内の南スラヴ人は帝国の枠組みにとどまることをその代表が正式に表明したことである。ユーゴスラヴィア委員会は結成以来、ハプスブルク帝国内のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は帝国の支配からの解放と南スラヴ統一国家への参加を望み、ユーゴスラヴィア委員会はこの願いを代表して行動しているということを連合国に訴えてきた。したがって、「五月宣言」の前提とするハプスブルク王朝支配の存続は、委員会の政策に根本的に反する。ユーゴスラヴィア委員会は南スラヴ人の民意を正式に代表する機関ではなかったため、帝国議会の南スラヴ人代議員が議会の場でハプスブルク王朝に対する忠誠を述べたことは委員会の運動にとっては大変迷惑な話であった。実際、ユーゴスラヴィア委員会のメンバーの中には不満を隠さない者もいた<sup>76</sup>。

しかし、ここで見逃せない事実は、帝国の枠組みの中ではあるが南スラヴ人の統合国家を求める政治集団が帝国内部に出現したことである。彼らの行動は後に、南スラヴ人統一国家の形成に関する、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府とは別の第三の政治主体の出現につながった。もちろん、彼らの声明は「ハプスブルク王朝の支配のもとで」という限定付きであるが、これは合法性を確保するためにはやむを得ない表現であり、この点に過度にとらわれると「五月宣言」の意義を見失うことになるだろう。このあとクロアチア議会では、スタルチェヴィッチ権利党のアンテ・パヴェリッチを始め多くの政党指導者が「五月宣言」に対して支持を表明した。ユーゴスラヴィア・クラブの出現と「五月宣言」は、セルビアのパシッチにとっても無視し得ないものとなった。したがって、それらは、少なくともコルフ島での会談には逆風にはならなかったと思われる。

1917年6月、ユーゴスラヴィア委員会の代表はコルフ島に到着し、セルビア政府代表と協議を始めた<sup>77</sup>。「統一国家の形成に関してあらゆる問題を協議したい」というパシッチの申し出の通り、両者は、統一国家の名称、王朝、公用文

字、信仰の問題など様々な問題を話し合った。その中で主要なテーマは、民族問題に関する見地と解決方法、国家制度のあり方、統一後の暫定措置であった。とりわけ統一国家の国家制度のあり方は最大の時間が費やされた問題であった。

この問題に関しては、セルビア政府とユーゴスラヴィア委員会は、根本的に見解を異にしていた。二つのモデルの対立があった。一つはセルビア政府が主張する中央集権的な単一国家であり、もう一つはトルムビッチらの主張する分権的な国家制度である。

パシッチは、統一国家の内部に二つまたは三つの国家的単位ができると外国の干渉を招きやすくなると述べ、すべての人民の利益にかなうという理由から単一の国家制度を擁護した。パシッチはまたこう述べ、連邦制の導入にはきっぱりと反対した。セルビア人は民族的一体感が強いので、全セルビア人が一つの国家に統合されなければ同意しない。したがって、連邦制はセルビア人にとっては不可能な選択肢である。セルビア側が主張する単一国家制は、セルビアに中央政府を置く中央集権制国家をモデルとしていることは明らかであった。これに対して、トルムビッチは、国家の統一に賛成した上でその中身を問題にした。トルムビッチは、ベオグラードにすべての権限が集中した場合には国家機構は円滑に機能しないと述べ、中央政府に権限を集中させる中央集権主義には明確に反対した。トルムビッチの念頭にあった国家制度は、複数の自治政府から構成される国家である。それは連邦制のモデルに置き換えてもよいものであるが、セルビア側がこれを受け入れないことを見越して、「連邦制」という言葉を使用することを彼は慎重に避けた。その代わりに、中央政府の役割と権限を限定的にし、広範な地方自治の導入を求めた<sup>78</sup>。

話し合いは平行線をたどった。これだけ隔たりのある立場を融和させるのはほとんど不可能であったが、国際関係はある種の妥協を双方に不可避的なものにした<sup>79</sup>。結局、国家制度の問題について両者は合意を先送りにし、統一国家の形成後に招集される憲法制定議会において決定することにした。1917年7月20日、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府は、「コルフ宣言」と呼ばれる協定文書に署名した。統一国家の名称は「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」である<sup>80</sup>。この国家は、セルビアのカラジオルジェヴィッチ王朝を

国王とする立憲君主制国家であり、普通・平等・秘密・直接の選挙制度によって選出される議会に基づいて運営され、同等な二種の文字、三種の民族名と旗、平等な三宗教をもつと述べられた<sup>81</sup>。

ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府は、協議の中で合意できなかった点をすべて先送りにした。統一国家の樹立後に憲法制定議会で国家制度が最終決定されるまで、どのような暫定措置が適用されるのかも決まっていなかった。国家の名称に典型的にみられるように、合意された事項も多くは妥協の産物であり、どちらの側も完全に満足していなかった。それでもユーゴスラヴィア委員会は、「コルフ宣言」を委員会の目的を実現する重要な文書だと考えた。しかし、セルビア側に言わせれば、それは連合国の世論に好感を与えることをねらった宣伝文書であった<sup>82</sup>。

「コルフ宣言」の署名の後、トルムビッチは、セルビア政府がイニシアチブをとり、連合国政府に対して、南スラヴ人統一国家の樹立を戦争目的に組み込み、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」を外交的に承認することを求めることを提案した。しかし、パシッチは、そのような行為は時宜にかなっていないとして、この提案に同意しなかった<sup>83</sup>。その後、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府との関係は再び冷却化し、相互不信に満ちるようになった。

パシッチは、「コルフ宣言」の内容を連合国側の各国政府に直ちに伝えたが、連合国の側は目立った反応を示さなかった。連合国は、オーストリア＝ハンガリー帝国の解体を引き続き考えていなかった。それどころかドイツを孤立させるため、オーストリア＝ハンガリーを単独休戦させる交渉を水面下で続けていた。パシッチは、パリ、ロンドン、ローマを訪問して、連合国の意向を察知した。それゆえ、パシッチは、南スラヴ統一国家に実現性がないことを確信し、大セルビア主義に基づく単独国家の形成という目標に再び関心を戻した<sup>84</sup>。彼にとって「コルフ宣言」は必要のない文書になった。

パシッチが「コルフ宣言」を無視し、具体的な行動を一切とらなかったため、トルムビッチらは、南スラヴ人の統一国家の実現に向けて独自の運動を展開することを余儀なくされた。その後、オーストリア＝ハンガリー帝国の枠組みを

保全するという連合国の態度は 1918 年の初めまで変わりがなかった<sup>85</sup>。

## 6 コルフ宣言の意味

南スラヴ人統一国家の建国運動はこのあと 1918 年に大きな山場を迎える。しかし、本稿は、「コルフ宣言」を運動の一つの到達点とみる立場から書かれている。したがって、その後の出来事を鑑みつつ、「コルフ宣言」の意味について中間的なまとめをしておきたい。

「コルフ宣言」の意義は、第一に南スラヴ人統一国家の形成についてセルビア政府が初めて合意文書を作成したことである。すでに述べたように、セルビアの指導者の第一目標は全セルビア人を一つの国家に統合する大セルビア的な民族国家の樹立であり、南スラヴ人統一国家の形成はこの本願が成就しなかった場合のオプションであった。しかし、まさかの事態に備えた「保険」であったとはいえ、セルビア政府がこの時点で明らかにした南スラヴ人統一国家の姿は、実際の統一国家の見取り図にもなった。その翌年に成立した統一国家は、「コルフ宣言」の合意内容をほぼそのまま引き継いだ。「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」という国家名称、セルビアのカラジオルジェヴィッチ王朝を国王にする立憲君主制の政体、普通平等選挙制の導入、議会制民主主義の理念などはすべて「コルフ宣言」で盛り込まれていた事項であった。ユーゴスラヴィア委員会は政府を正式に代表する機関ではなかったため、「コルフ宣言」は条約のようにその締結者を拘束する力を持たない文書であった。実際、セルビア首相のパシッチはこれを単なる宣伝文書とみなし、連合国の態度から南スラヴ人統一国家の非現実性を再確認するとこれを完全に無視した。しかし、それはやはり空文書ではなかったのである。

「コルフ宣言」の特徴は、第一にそれが妥協の産物であり、合意できなかった事項をすべて先送りにしたことである。とくに統一国家の国家制度について、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府は根本的に構想が異なり、これを統一国家の形成後に招集される憲法制定議会において決定することにした。しかし、

統一国家の樹立後に憲法制定議会が国家制度を最終決定するまで、どのような過渡的措置が適用されるのかは明らかではなかった。そのため、新国家の最初の二年間には、大戦前のセルビアの制度と政治モデルが暫定的に適用され、セルビアの軍隊と官僚が統治にあたることになった。

第二に、奇妙なことに「コルフ宣言」には、セルビア、クロアチア、スロヴェニアといった南スラヴ人諸地域の歴史的な地名が出てこない。これは、「コルフ宣言」の想定する国家は、歴史的あるいは民族的な境界によって区分される地域を行政単位として構成されるものではないことを意味していた。それは、新国家の建設後、「歴史的な権利主義と領土区分の正統主義との決別」と解釈された<sup>86</sup>。

注目されるのは、セルビアとの統一国家の合意を成立させるため、「歴史的な権利主義の放棄」をトルムビッチが容認していたことである。「コルフ宣言」締結後、彼はクロアチア議会の有力議員が派遣した代表と会談する機会があった。クロアチア人の政治家がもっとも関心があったのは、セルビアとの統一国家が実現した場合にクロアチアの歴史的な権利である自治権はきちんと保障されるのかということであった。これに対して、トルムビッチはこう答えた。「クロアチア人は、クロアチア国家再興の要求と真の国家連合の樹立という観念を捨てなければならない。そうでないとセルビアは統一国家の建国に絶対に同意しない。分権的な行政機構は、『すべての諸地方の自由な発展』というコルフ宣言の文言によって確保することができる。クロアチア人は宣言に対して満足を表明し、実現不可能な国権に対する野心を放棄しなければならない」<sup>87</sup>。もちろん、このような方針で新国家が組織されることはクロアチア人には受け入れられないことであった<sup>88</sup>。

コルフ島での協議は、一ヶ月を超える期間と24回の会合を費やした。この会議の歴史的な意味は、セルビアの政治指導者とオーストリア＝ハンガリーの南スラヴ人政治指導者とが史上初めて顔を突き合わせて協議の席につき、それぞれが考える民族像と国家像を相手に披露し、統一国家の形成をめざしてそれなりに歩み寄りを模索したことにあった。シュトロスマイエル以来、南スラヴ人統一主義者の国家構想はセルビアとの統合国家を最終目標としていたため、ハ

プスブルク帝国の南スラヴ人の代表とセルビア代表との統一国家の交渉は論理的には当然の帰結であった。だがそのような交渉は大戦前の国際関係の中では不可能であった。それは第一次世界大戦中に既存の国際秩序が変化する中で初めて可能になった。

大変興味深いことに、パシッチとトルムビッチおよびスーピロは、ある点では共通の民族観をもっていた。それは、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人を「一つのナロード」だとみていたことである。ナロードは英語で言えばピープルにあたる。比喩的にいえば、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の三民族は「南スラヴ人」という一本の太い幹から分かれた三つの枝である。三民族は顔かたちをやや異にするが、身体の中には共通の血を受け継いでいる兄弟のようなものである。このように考える点でパシッチとユーゴスラヴィア委員会は一致していたのである。三民族が一つのナロードであることはコルフ島での協議の場でも確認された。この上にたって、三民族が一つの国家を形成することに両者は原則合意したのであった。

ところが、そこから先で両者の見方は大きく違った。トルムビッチらは、三民族は完全に対等・平等・同権の関係にあることを早くから訴えてきた。クロアチアのセルビア人をクロアチア人との統一戦線に引き込み、「クロアチア人・セルビア人連合」を誕生させたこの考え方はセルビア王国のセルビア人には魅力的に映らなかった。彼らは、単なる平等以上のものを欲していたからである。

確かに彼らは表向きこの考えに同意し、それゆえ、「コルフ宣言」では三民族の完全な同権が書き込まれた。しかし、パシッチに代表されるセルビアの民族主義的な指導者は、統一国家の形成過程ではセルビア人が他の民族に対して優位に立つと内心考えていた。クロアチア人やスロヴェニア人はこの過程では受動的な役割を果たすにすぎない。なぜなら、クロアチア人やスロヴェニア人は、セルビアの力によって解放される南スラヴ人であるからである。19世紀の自治権獲得以来、セルビアの指導者はオスマン帝国とハプスブルク帝国の支配にある全セルビア人を解放し、セルビア国家に統合することを歴史的・民族的な使命とした。セルビアは何度も窮地に陥りながらもこの使命を忠実に実行してきた<sup>89</sup>。セルビアは領土を拡大し、バルカン半島屈指の強国になった。しかし、そ

のためにセルビアは多くの戦死者を出し、物的損害も大きかった。今また全南スラヴ人の解放を求める戦いに参加し、苦戦を強いられている。このように多大の犠牲を支払って南スラヴ人解放の戦いを続けてきたセルビアが、統一国家の形成過程で主導権を握るのは当然である。南スラヴ人統一の事業は、セルビアが「ピエモンテ」の役割を果たすことによるのみ完成される。このようにパシッチらは考えていた<sup>90</sup>。

これに対して、トルムビッチらはこう考えた。南スラヴ人が統一国家を形成する資格を有するのは、セルビアが多大な犠牲を払って民族的使命を遂行してきたからではなく、南スラヴ人が「民族自決の権利」をもつからである。したがって、ハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域は、セルビアと対等・平等に統一国家に参加する権利がある。帝国の外部の地域でセルビアが指導的役割を果たすのは差し支えないが、ハプスブルク帝国内の南スラヴ人諸地域ではこの地域の中心であるクロアチアが指導権を握ることを認めてもらわなければならない<sup>91</sup>。このような考え方から、トルムビッチとスーピロは統一国家の国家制度は連邦制ないし地方自治を基本原則にせざるを得ないと考えた。

19世紀以来、セルビアは武力と戦争で領土を拡大してきた。獲得した領土と住民は一方的にセルビア国家に併合した。したがって、セルビアの指導者は、統一国家樹立の事業を南スラヴ人の解放ではなく、新しい領土の征服だと本音では考えているのではないか。トルムビッチらはそう疑った<sup>92</sup>。もしそうならば、この統一国家は「拡大セルビア」にすぎない。それゆえ、新しい国家は分権的に組織されることを彼らは求めた。連邦制ないし地方自治の確立は譲ることのできない原則であった。セルビアを中心とする中央集権的な単一国家は彼らが求めるモデルとは対極にある国家であった。ところが、このようなセルビアの国家目標に関わる根本問題について、パシッチが譲歩するはずはなかった。結局、ユーゴスラヴィア委員会とセルビア政府は統一国家創設の合意を優先して、国家制度の決定を先送りにした。セルビアと取引する材料をもたないユーゴスラヴィア委員会はそうするしか選択肢はなかった。その結果、「コルフ宣言」は来るべき統一国家の出生証明となったが、同時にその後の争いの種もその中に確実に胚胎することになったのである。

## 註

- 1 材木和雄「東欧の体制変動と民族問題 - ユーゴ紛争の根本問題」、北原淳・大野道邦編『社会学 理論・比較・文化』、晃洋書房、1994年、213-214頁。
- 2 基本的な相違は、スロヴェニアとクロアチアは長くハプスブルク帝国の支配下において西ヨーロッパ文明圏に属し、カトリック教徒が多く、アルファベットにはラテン文字を使用する。これに対して、セルビアは東方文化圏に属し、(セルビア)正教がいわば国教であり、アルファベットにはキリル文字を使用する。またトルコの支配の影響も強い。
- 3 もう一つは、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを中心に、イスラム教を受容する南スラヴ人が大量に出現したことである。
- 4 発端はハプスブルク帝国内の公用語の変更をめぐる問題であった。帝国内の全地域の行政にラテン語に代えてドイツ語を導入しようとするウィーン政府に対して、ハンガリーの支配民族であるマジャール人はマジャール語の使用をも認めるように主張した。支配民族にとっては自民族の言語を公用語にすることは被支配民族に対する支配の強化につながるため、ハプスブルク帝国内でも、どの言語を公用語にするのかが政治的な争点となったのである。ハンガリーに属する自治王国であるクロアチアに対しては、マジャール語の使用を強制しようとするハンガリーの圧力が強まり、クロアチア人貴族はこれに屈して、1827年に議会は学校教育にマジャール語の使用を義務づけた。
- 5 ガイ(1809-72年)はザグレブ近郊のクラピナという町に生まれたが、クロアチア人の生まれではなかった。母親はドイツ人であり、父親はスロヴァキア人であった。
- 6 ガイは1830年に「クロアチア・スラヴ語正書法の基礎」という書物を著し、正書法の改革を提案、さらに1835年「クロアチア新聞」と週刊の文芸誌「クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアの明星(ダニツァ)」を創刊し、反マジャールの論陣を張った。翌年、両紙は「イリリア新聞」「イリリアの明星」と改名し、シュト方言のみを使用して書かれた。
- 7 1809年、ナポレオンは、スロヴェニア、クロアチアの一部、ダルマチア、ドゥブロヴニクをオーストリアから割譲させ、これらを「イリリア諸州」という行政単位にまとめて、イタリア王国に編入した。これは1813年に終わる一時的な統治の変更であったが、ハプスブルク帝国内のスロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人を初めて統一的な行政単位に統合することになり、相互に交渉の機会を与えて、彼らに南スラヴ人としての共通性を自覚させることになった。イリリア運動の発生もその集合的記憶の影響によるところが大きい。またイリリア諸州は、旧来の封建的な統治制度を廃止し、フランス民法を導入して近代的な統治を行う同時に民族語による教育、新聞発行などを通して諸民族の民族意識を育成した。たとえば、スロヴェニア人の居住地域ではスロヴェニア語が史上はじめて公用語となり、スロヴェニア人の民族的覚醒のきっかけとなった。
- 8 セルビア人の国家構想に大きな影響を与えたのは、言語学者のヴク・シュテファノヴィッチ・カラジッチとセルビアの首相と外相を務めたイリヤ・ガラシャニンであった。カラジッチは、南スラヴ人の諸地域を渡り歩いて言語学的、民俗学的な調査をおこない、1849年に「三つの宗教をもつセルビア人の歴史、言語、習俗」という著作を著した。すでに述べたように、セルビア人とクロアチア人の話す言語には三つの方言があるが、カラジッチはこの著作の中でシュト方言を話す人びとをすべてセルビア人の中に分類した。シュト方言を話す者はセルビアだけでなく、クロアチアとボスニア・ヘルツェゴヴィナの諸地域にも居住し、宗教的にも正教徒もいれば、カトリック教徒やイスラム教徒もいた。しかし、宗教の違いにかかわらず、シュト方言を話す者はセルビア人であるとカラジッチは主張した。彼の考えに従えば、クロアチア人の大半はカトリックに改宗したセルビア人であり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの諸地域のムスリム人はイスラム教に改宗したセルビア人であり、クロアチア人とはチャ方言とカイ方言を話す人びとだけになる。

以上のような考えを前提に、「セルビア人のネーション・ステート」を構想すると、その領土にはクロアチアの大半の地域とボスニア・ヘルツェゴヴィナの諸地域を含む南スラヴ

人の広大な地域が含まれることになる。イリヤ・ガラシャニンはこうした大セルビア国家の実現を政治的プログラムに仕上げた。1844年に彼は、「ナチェルターニェ」と呼ばれる秘密文書を作成した。この文書の中で、セルビアの使命はオーストリアとトルコに対するセルビア民族解放闘争の準備と実行にあり、セルビア民族国家を拡大していくことだとガラシャニンは説いた。ナチェルターニェはセルビアの膨張主義路線の基本綱領となった。

<sup>9</sup> シュトロスマイエル(1815-1905年)は、ドイツ系オーストリア人を曾祖父にもつクロアチア人であり、スラヴォニアのオシエクに生まれた。ウィーンで神学の博士号を、ブダペストで哲学の博士号を獲得し、帰国してからは神学校の教授を務めていた。1848年、クロアチア総督のヨシプ・イェラッチの推薦で、スラヴォニアのジャコヴァの司祭に任命された。彼は、深い教養と学識の上に立った弁論術によって、カトリック教会の中では名声を博した学僧であった。世俗の活動、とくに政治活動も活発におこない、クロアチアの議会(サボル)の代議員、イリリア党の流れを引く民族党の実質的な指導者であった。盟友の歴史家フラーニョ・ラチキの協力を得て、南スラヴ統一主義思想の普及と推進に尽力した。

彼が生まれたスラヴォニアは肥沃な穀倉地帯であり、シュトロスマイエルは司教区の所有地から多額の地代収入を得ていた。特筆すべきことは、彼はそこで得た収入の大半を、クロアチアの教育・文化・芸術活動の支援のために、惜しげもなく注ぎ込んでいたことである。なかでも、「ユーゴスラヴィア」という名を冠した最初の組織であるユーゴスラヴィア科学芸術アカデミーの創設(1860年)および南スラヴ地域で最初の大学であるザグレブ大学の開設(1874年)のために多額の寄付を行ったことが有名である。ユーゴスラヴィア科学芸術アカデミーの創設には、学問・芸術活動の交流を通して南スラヴ人、とくにセルビア人とクロアチア人の精神的・文化的な連帯を涵養するというねらいがこめられていた。このような学術活動の充実によって、クロアチアを、イタリアのトスカナ地方に比肩するような南スラヴ地域の文化的センターにしたいというのがシュトロスマイエルの願いであった。

<sup>10</sup> 以下に示したシュトロスマイエルの考え方は、次の文献による。Jaroslav Šidak, *Studije iz Hrvatske Povijesti Stoljeća*, Institut za Hrvatku Povijest, 1973, p.80-81, *Enčiklopedia Jugoslavia Vol.8, 1971, p.197.*

<sup>11</sup> 1851年、ローマ=カトリック教会は、シュトロスマイエルをセルビアに対する伝道司教に任命した。これによって、シュトロスマイエルはセルビアをたびたび訪問し、セルビア政府の指導部とコネクションを確立した。興味深いことに、シュトロスマイエルは、セルビア政府と南スラヴ合同国家の可能性を検討したこともあった。

1866年夏にシュトロスマイエルは、オーストリアおよびトルコから独立した南スラヴ統一国家を形成するために、三位一体王国(クロアチア)とセルビア公国が共同行動をとらないかという打診をセルビア政府から受けて、これに同意を与えている。セルビアのねらいは、ボスニア=ヘルツェゴヴィナをトルコの支配から解放し、セルビアに併合することであった。この年、ドイツ統一をめぐる、プロシアとオーストリアの間で戦争が起こった。戦争に敗れたオーストリアでは、スラヴ人やマジャール人など被支配民族の自治の要求が高まった。彼がセルビアとの共同行動を真剣に検討したのは、こうしたハプスブルク帝国の動揺によって帝国が解体に向かう可能性があると考えたからであった。

しかし、オーストリア政府は、翌1867年マジャール人の要求を受け入れて、国家の再編成に乗り出した。この結果、ハプスブルク帝国は、オーストリアとハンガリーが対等の関係で連合して構成される二重帝国になった。ハプスブルク帝国が危機を克服したことをみて、セルビアのミハイロ・オブレノヴィッチ公は、ハンガリーとの協調行動に転じ、シュトロスマイエルの民族党との合意を直ちに破棄した。さらにシュトロスマイエルに対して、ハンガリー政府と和解し、クロアチアとハンガリーとの統治協定(ナゴドバ)を受け入れるように促した。シュトロスマイエルはこれを受け入れず、両者の関係は決裂した。以上、*Enčiklopedia Jugoslavia Vol.8, p.197*、Hrvoje Matković, *Suvremena Politička Povijest*

*Hrvatke*, Ministarstvo unutarnjih poslova Republike Hrvatske, 1995, pp.22-23 による。

<sup>12</sup> このことの理解を助けるため、当時の問題状況を簡単に説明しておきたい。

クロアチアは地理的には4つの地域に分かれる。ザグレブを中心とする狭義のクロアチア、東部の農業地帯スラヴォニア、アドリア海沿岸とその後背地を含むダルマチア、およびアドリア海北部の小半島部イストラである。このうち、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアの三地域は、中世以来のクロアチア王国固有の領土であるとクロアチア人はみなしている。これは正式には「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」と呼ばれる。ハプスブルク帝国のスラヴ人の居住地域の中で、クロアチアは王国の地位を認められていた唯一の国であり、その王はオーストリア皇帝が兼任していた。19世紀初めの段階で、クロアチアの諸地域のうち、クロアチアとスラヴォニアはクロアチア総督府の支配下にあったが、ダルマチアとイストラはオーストリアの支配のもとにあった。さらにボスニア＝ヘルツェゴヴィナに隣接する地域には、トルコに対する防壁として軍政国境地帯が設定され、ウィーンの軍事委員会の管轄下にあった。したがって、クロアチア人が歴史的に固有の領土と見なす地域のうち、クロアチア人の自治権が実際に及ぶ地域はきわめて限定されていた。

1813年にナポレオン帝国によるイリリア諸州支配が崩壊したあと、クロアチア人はオーストリア皇帝がダルマチアをクロアチアに合体させることを望んだ。ダルマチアがクロアチアの一部であることはハプスブルク家の憲法上ははっきりしており、これを実現することは公正な解決であったが、オーストリアはダルマチアをオーストリアの州にした。そればかりか、オーストリアはダルマチアの自治権を強め、その議会（サボル）がクロアチアとの合体を決議しないように働きかけた。

1848年にクロアチア総督のヨシブ・イエラチッチは4万人のクロアチア人部隊を率いて、ハンガリー革命の鎮圧に参加した。この戦争にはヴォイヴォディナのセルビア人も参加した。イエラチッチは1849年8月までにマジャール人の反乱を鎮圧した。このとき論功行賞としてクロアチア人は、クロアチア国王の地位にあるオーストリア皇帝が帝国の連邦化をおこない、クロアチアの国家的地位を強化してくれることを期待した。1849年のハプスブルク家の憲法は、クロアチアとスラヴォニアをハンガリーと分離したオーストリアの1州であると宣言し、この州にフィウメ（リエーカ）港を与えた。またセルビア人に対する報賞として「セルビア人ヴォイヴォディナ自治区」をつくった。しかし、これらの措置はまもなく反古にされ、1850年代にはウィーン政府は専制主義的な中央集権化を進めて、かえってクロアチアの自治は抑制された。その後イタリアとの戦争に敗れたオーストリアは1860年に自治権の復活を約束したが、翌年にはまたしても反古にされ、中央集権制が続けられた。

1866年にオーストリアはプロシアおよびイタリアとの戦争に敗れ、支配体制を立て直すため国家制度の再編成を迫られた。1867年に皇帝フランツ・ヨーゼフは、マジャール人の要求に譲歩して、ハプスブルク帝国の領土を、オーストリアが支配する部分とハンガリーが支配する部分に分割することに同意した。両国は対等の関係で連合国家を形成し、ハプスブルク帝国はオーストリア＝ハンガリー二重帝国になった。クロアチアとスラヴォニアはハンガリーに併合されたが、1868年にハンガリー政府はクロアチア議会と協定を結び、クロアチアに内政上の自治権を認めた。しかし、その自治権は不十分なものであり、ハンガリーはクロアチア支配の実権を留保していた。

ハンガリーとクロアチアの協定はナゴドバと呼ばれた。ナゴドバは、クロアチア人を「独自の領土を所有し、政治組織を有する民族」とであると認め、従来通り立法機関としてザグレブに議会（サボル）を開設することを認めた。クロアチア政府が担当するのは、内務、裁判、宗教・教育で、この三者の長官がクロアチア内閣を形成する。国家の公用語はクロアチア・セルビア語と認められた。クロアチアの総督（バン）は、皇帝によって任命される。しかし、その推薦権をハンガリーの首相が握っていた。しかも総督は、クロアチアの議会ではなく、ハンガリー内閣に責任を負うことになっていた。クロアチアの議会は、ク

ロアチアとハンガリーの共通議会であるハンガリー議会に対して、下院では総数 453 名中 29 名（のち 40 名）上院では総数 400 名中わずか 3 名しか代議員を送れなかった。二重帝国の共通問題は、オーストリアとハンガリーの代表 60 名によって決定されたが、ハンガリー代表団に参加するクロアチア人は 5 名に限定されていた。その上、イストラ、ダルマチアおよび軍政国境地帯は依然オーストリアの支配のもとにあり、クロアチア王国の領土は分断されたままであった。以上のような状況から、クロアチアのあらゆる政治集団は、ダルマチアと軍政国境地帯をクロアチア総督府の管轄下におくこと、国家機関（議会、総督、政府）の権限の強化を活動の目標にかかっていた。

シュトロスマイエル当初の政治的立脚点は、ハプスブルク帝国を連邦制の国家に再編し、スラヴ人とドイツ人・マジャール人との対等・平等な地位を実現するというオーストリア・スラヴ主義にあった。その連邦の単位には、「クロアチア・スラヴォニア・ダルマチア三位一体王国」が含まれ、これによってクロアチア問題を解決することを彼は考えていた。しかしながら、上述の歴史的経緯に示されようようにオーストリアとハンガリーは非妥協的な態度をとり、何度もクロアチア人の期待を裏切った。その結果、このような解決策は放棄せざるを得ず、シュトロスマイエルは帝国の解体を前提として南スラヴ人の統一国家を建国することを最終目標とする国家構想を抱くようになったのである。

<sup>13</sup> この点に関して、レデラーは、「シュトロスマイエルは、セルビア人およびスロヴェニア人との統一にまで視野を広げたときにのみ、クロアチアの政治、文化両面における将来がはじめて約束されると考えていた」と述べている。Ivo John Lederer, "Nationalism and the Yugoslavs", in Peter F. Sugar and Ivo John Lederer (ed.), *Nationalism in Eastern Europe*, University of Washington Press, 1969, p.419.

<sup>14</sup> クロアチアにおいてセルビア人が無視できない大きな力を有する理由は、第一にその人口の多さである。1840 年にクロアチアとスラヴォニアではクロアチア人が 107 万 5627 人 (66.99%) であるのに対して、セルビア人は 56 万 4179 人 (31.90%) を占めていた。軍政国境地帯ではセルビア人の比率はもっと高い。クロアチアのクライナ地方では、クロアチア人は 25 万 8454 人 (51.80%) であるのに対して、セルビア人は 24 万 493 人 (48.20%) を占めていた。スラヴォニアでは、クロアチア人は 12 万 7326 人 (49.44%) であるのに対して、セルビア人は 12 万 2853 人 (47.70%) であった。第二に、セルビア人は、クロアチアの権力機関に人口比以上の割合で参加していた。たとえば、1848 年のクロアチア議会（サボル）における代議員の構成をみると、セルビア人は 50% 近い比率を有していた。政治機関、教育機関、経済機関においても同様の状況であった。以上、Drago Roksanđić, *Srbi u Hrvatskoj*, Vjesnik, Zagreb, 1991, pp.77-78 による。

<sup>15</sup> 1873 年にクロアチア総督に就任したイワン・マジュラニッチは、自由主義的な改革を推進し、その一環として初等義務教育の世俗化を断行し、教会の学校に対する監督権を排除し、これを教育委員会に移行させた。ところが、この改革はカトリックと正教会双方の反発を引き起こした。とくに教会学校の自治権を否定されたセルビア正教会の怒りは大きかった。セルビア正教はセルビア人の民族的アイデンティティを構成する要素であり、正教会の学校自治権の否定はセルビアの民族教育の否定だと映ったからである。これを契機にセルビア人の世論は、反クロアチア、反カトリックの立場をとるようになった（Dušan Bilandžić, *Hrvatska Moderna Povijest*, Golden Marketing, Zagreb, 1999, pp.32-33）。また 1878 年にオーストリアがボスニア＝ヘルツェゴヴィナを占領したこともクロアチア人とセルビア人との関係に悪影響を与えた。ボスニア＝ヘルツェゴヴィナはクロアチア人とセルビア人が混住する地域である。オーストリアによる併合の結果すべてのクロアチア人が 1 つの国家の中に統合されることになったので、クロアチア人はこれを内心歓迎し、中には「大クロアチア」を構想する者もいた。しかし、同地に領土的野心を持っていたセルビア王国はオーストリアによるボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合に憤慨し、クロアチアのセルビア人もクロアチア人の態度を敵視した。以上、ステューブン・クリソルド編（田中一生他訳）『ユーゴスラヴィア史』、恒文社、1980 年、51 頁。

16 クエン＝ヘーデルヴァーリは、少数派のセルビア人を優遇し、クロアチア人の神経を逆なでする措置を次々と打ち出して、セルビア人に対するクロアチア人の反感や妬みを誘った。たとえば、セルビア正教会の強い要求であった教会学校の自治権の回復、ギムナジウムに対するセルビア人が使用するキリル文字教育の導入、政府機関におけるキリル文字とラテン文字の平等使用、クロアチア語の「クロアチア・セルビア語」という呼び名への変更、セルビアの旗とクロアチアの旗の平等使用、政府機関におけるセルビア人の重用、議会（サボル）の議長へのセルビア人の起用、セルビア人企業に対する金銭的な補助などである。以上、Bilandžić, *Hrvatska Moderna Povijest*, pp.33-34, による。

17 両民族の対立のフィナーレは、1902年にザグレブで起こった反セルビア暴動であった。そのきっかけは同年8月に、セルビア民族独立党の機関誌『セルビア防衛』が、ベオグラードの『セルビア文芸雑誌』に掲載されたクロアチア人を中傷する記事を転載したことであった。記事の内容は、クロアチア人は独自の国民でも民族ではなく、セルビア人に同化していくのが唯一の道だというものであった。この記事はクロアチア人の反セルビア感情という火に油を注ぐ結果になり、暴徒化したクロアチア人の民衆は、セルビア人の商店や仕事場を打ち壊し、火を付けた（Josip Hrvac, *Politička Povijest Hrvatske 1*, Augst Cesarec Zagreb, Zagreb, 1990, p.246.）。

18 19世紀後半にはクロアチアを代表する政治集団は、シュトロスマイエルが指導し、南スラヴ統一主義を主張する民族党と、スタルチェヴィッチが創設し、クロアチア主義を信奉する権利党のグループに大きく分かれた。民族党は、オーストリア＝ハンガリーの支配体制が安定するにつれて、帝国外に南スラヴ人統一国家を建国するというシュトロスマイエルの路線を事実上放棄し、1880年代には総督クエン＝ヘーデルヴァーリに追従する親ハンガリーの与党政党になった。権利党は、1871年にクヴァルテルニクのグループが武装蜂起したことにより政治活動を禁止され、1878年に政治活動を許された。しかし、権利党は内部に路線対立を抱え、1890年代にはオーストリア＝ハンガリー外でのクロアチア人民族国家の建国を断念し、セルビア人の存在を認める穏健派と、結党時の理念であるクロアチア人民族国家の樹立を追求する急進派に分裂し、後者は1895年に真正権利党を結成した。

19 プラハ大学のマサリクは、独自の現実主義の立場から偏狭な民族主義や反ユダヤ主義を批判し、ハプスブルク帝国の連邦化を訴えていたが、ザグレブ大学に学んでいたクロアチア人、セルビア人学生の中には、マサリクの思想に共鳴して、クロアチア、セルビア両民族の対立の不毛性を反省し、両民族の和解と協調を志向するグループが1890年代に出現した。このような考えをもった両民族の学生集団は、1895年の反マジャール運動を契機に接近し、1897年には「統一クロアチア人・セルビア人青年」という組織を結成した。学生集団の指導者の中には、1905年に成立した「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者となったスヴェトザール・プリビーチェヴィッチ（セルビア民族独立党）、イワン・ロルコヴィッチ（クロアチア進歩党）がいた。また反マジャール運動で大学を追放され、プラハ大学のマサリクのもとへ留学することになった学生の中には、後にクロアチア大衆農民党を組織するステパン・ラディッチがいた。

1903年には重要な事件が起こった。第一に、これまでクロアチアのセルビア人が後ろ盾にしてきたクエン＝ヘーデルヴァーリ総督がハンガリー首相に転出したことである。後任の総督は、クロアチア人の反対勢力に融和的な態度を示した。第二に、セルビア王国でクーデターが起き、親オーストリア＝ハンガリー路線をとっていたオブレノヴィッチ王朝が倒れ、カラジョルジェヴィッチ王朝が復活した。これによってセルビアは、汎スラヴ主義を唱えるロシアを親密な後援者とし、オーストリア＝ハンガリーと対立する外交路線に転じた。もちろん、このことによりクロアチアのクロアチア人とセルビア人との関係が直ちに改善したわけではない。しかし、セルビアの新王朝のもとで外交路線がにわかに民族主義的色彩を強め、オーストリア＝ハンガリーとの緊張関係が深まるにつれ、クロアチアのセルビア人、とくにブルジョアジーを中心とする支配層は、これまでのよう親ハンガリー・反クロアチアの路線を続けていくことでは、政治的・経済的な既得権を維持できなくなる

のではないかと考え始めた (Jaroslav Šidak, Mirjana Gross, Igor Karaman, Dragovan Šepić, *Povijest hrvatskog naroda 1860-1914*, Školska Knjiga, Zagreb, 1968, p.215. )

<sup>20</sup> トルムビッチ (Ante Trumbić 1864-1938) は、ダルマチア地方最大の港町スプリットの出身。弁護士を経て、1895年クロアチア権利党からダルマチア議会の議員に選出され、1897年以後はオーストリア＝ハンガリー帝国議会議員を務めた。第一次世界大戦勃発直後に帝国を脱出し、スーピロとともにユーゴスラヴィア委員会を設立し、1918年の統一国家樹立後には外相を務めた。

スーピロ (Frano Supilo 1870-1917) は、ドゥブロヴニク近郊のツァヴタト出身。1895年からダルマチアにおける権利党の指導部に入り、また機関誌『赤いクロアチア』の編集者を務めた。1899年からリエーカに移り、機関誌『新報』の編集に携わり、クロアチアにおけるクエン・ヘーデルヴァーリ体制を批判する論陣を張った。

オーストリアが支配するダルマチアでは、ドゥブロヴニクを除くと、クロアチア人とセルビア人との政治的対立はハンガリー支配のクロアチアほど深刻ではなかった。ダルマチア議会で多数派を占めた民族クロアチア党は反セルビア的な政策を打ち出したことは一度もなかった。かつてセルビア人の存在を否定する立場をとっていた権利党も、民族クロアチア党に接近すると同時に、反セルビア的な態度を和らげる方針に転換した (Šidak, *et. al.*, *op.cit.*, p.217. )

<sup>21</sup> 当面の課題はクロアチアおよびスラヴォニアとダルマチアとの統一を実現し、ハプスブルク帝国内で経済的・政治的な自主権を獲得することであるが、その最終的な目標は独立の南スラヴ人統一国家の樹立であった。

<sup>22</sup> 民意の表明を担保する自由選挙法の制定、思想・言論・出版の自由の保障、司法権の独立、行政の専横から市民の権利を守るための特殊な裁判所の設立など。

<sup>23</sup> ハンガリーの最大野党勢力である独立党は、帝国内でオーストリアと共通に遂行される事項をなくして、君主による人的結合だけを認め、オーストリア＝ハンガリーを完全に独立国家連合の形態に再編することをめざしていた。その背景にはハンガリーの経済的、文化的発展がめざましく、マジャール人が過大な民族的自信に満ちるようになったことがある。1902年以来、独立党の要求は次の二点に集中した。第一に、オーストリアとの関税同盟や貨幣同盟をやめて、経済上の自主性を確保することであった。共通関税はハンガリーの工業化に不利であり、産業資本家を中心に関税自主権を求める勢力が支配階級内に台頭していたからである。第二に、マジャール語を指揮語とする独立のハンガリー軍の創設であった。帝国軍隊は共通でその命令用語はドイツ語に統一されていたが、独立党はこれに反対してマジャール語によるハンガリー軍の指揮を要求した。しかし、これにはハプスブルク帝国が大国であることを損なう恐れがあるとして、オーストリア皇帝フランツ＝ヨーゼフが強く反対していた。以上、矢田俊隆『ハンガリー・チェコスロヴァキア現代史』山川出版社、1978年、74-75頁による。

<sup>24</sup> マジャール独立党の指導者コッシュートは、スーピロとの会談の中で、ダルマチアとクロアチアとの統合を支持する意向を示した。ウィーンの皇帝との対抗上、マジャール人はクロアチア人の要求に対して譲歩の姿勢を示さざるを得ない状況にあった。なお諸民族の春と呼ばれた1848年革命でハンガリーに革命が起こったとき、クロアチア人の指導者イェラチッチは、ウィーンの皇帝の命を受けて、クロアチア・セルビア人部隊を指揮してハンガリーを攻撃し、革命の鎮圧にあたった。今またハンガリーが皇帝権力に挑戦をしているとき、クロアチア人がウィーンの皇帝に取り込まれて、ハンガリーの要求を抑えるカードとして利用されることをマジャール人反対勢力の指導者は恐れた。万一ウィーンの皇帝との争いが武力衝突にまで発展した場合に、クロアチアに第二のイェラチッチが出現し、クロアチア人・セルビア人部隊を率いて南方からハンガリーに進軍してくるような事態は絶対に避けたかった。マジャール人反対勢力の指導者がスーピロにリップサービスしたこと背景にはこのような深謀遠慮が働いていたとも考えられる。この点については、Bilandžić, *Hrvatska Moderna Povijest*, p.36, を参照。

25 クロアチア議会の選挙結果は、88の議席定数のうち、「クロアチア人・セルビア人連合」の議席は31であり、第二位の議席獲得にとどまった。しかし、38議席を獲得した親マジャールの民族党は、ハンガリーで野党が政権を獲得したため後ろ盾を失って解党に追い込まれた。「クロアチア人・セルビア人連合」は、19議席を獲得した真正権利党の協力を得て、政権を担当することになった。

26 フランツ＝ヨーゼフ皇帝は、マジャール人反対勢力の強硬な要求に対して、普通選挙制度の導入の意向を示すことで対抗した。普通選挙が実施されれば、マジャール人は他の民族に対して少数民族になり、マジャール人内部でも貴族や地主層は農民や都市労働者に対して少数になり、議会の反対勢力を含めてマジャール人支配層は民族的特権と階級的な特権を失うことは明白であった。さらに1906年2月にハンガリーの議会に皇帝の軍隊が突入し、憲法と議会政治は一時停止になった。結局、マジャール人反対勢力は態度を軟化させ、1906年4月に皇帝と妥協することにした。マジャール人反対勢力は、オーストリアとの関税同盟と通貨同盟を維持することに同意し、独立ハンガリー軍の創設に対する要求を取り下げた。皇帝は、普通選挙の導入を延期し、マジャール人反対勢力を首班する立憲政府を任命した。以上、A.J.P.テラー（倉田稔訳）『ハプスブルク帝国 1809-1918』筑摩書房、1978年、299-305頁、Šidak, *et. al.*, *op.cit.*, p.229、による。

27 それゆえ、「クロアチア人・セルビア人連合は、『新路線が』もはや成功の見込みを失ったそのときに政権の座に着いた。マジャール人野党連合はウィーンと和解したため、彼らにとってデュアリズムに対する闘争の同盟者（＝「クロアチア人・セルビア人連合」）はもはや必要ではなかった」のであった（Šidak, *et. al.*, *op.cit.*, p.230）。

28 その発端は、1907年にハンガリー政府がクロアチア内の鉄道員すべてにマジャール語の使用を要求する「鉄道規則条例」を議会で成立させたことであった。これは、クロアチアとハンガリーが1868年に結んだ国制上の協定（ナゴドバ）に違反し、クロアチアに認められた自治権の明白な侵害であった。

29 1908年8月にクロアチア在住のセルビア人53名がクロアチア内の汎セルビア運動を共謀したという容疑で逮捕された。7ヶ月続いた裁判は「アグラム（ザグレブ）大逆裁判」と呼ばれた。それはオーストリア＝ハンガリーがボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合を強行したときに起こった政治裁判であり、十分な証拠もなく立件されたので、ヨーロッパの新聞各紙は批判的に事件を報道した。

この裁判の間に、オーストリアの著名な歴史家フリートユングはウィーンの日刊紙「ライヒポスト」に一文を書き、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者たちはセルビア政府から賄賂を受けていると非難した。「クロアチア人・セルビア人連合」はフリートユングとライヒポストを名誉毀損で訴え、裁判の結果、フリートユングが根拠とした文書はオーストリア政府外務省が提供した偽造文書であることが判明した。フリートユングは一文を撤回した。

30 上述のフリートユング裁判の過程で被告側の証人チュルメツキー男爵は、「クロアチア人・セルビア人連合」の指導者であったフラノ・スーピロがセルビアの秘密機関から報酬を受けていたと証言した。そのため、スーピロは連合の指導的地位を辞職せざるをえなくなった。「新路線」の挫折後に反オーストリア＝ハンガリーの急先鋒に転換したスーピロが1910年1月に連合を離れたあと、「クロアチア人・セルビア人連合」の実権はセルビア独立民族党のスヴェトザール・プリビーチェヴィッチに移った。セルビア人であるプリビーチェヴィッチは、クロアチアの国権の回復を至上命題とはせず、むしろクロアチアにおけるセルビア人の文化的・経済的な既得権と政治的権力を維持することを最大の目標とした。彼の指導のもとで「クロアチア人・セルビア人連合」は、日和見主義的な方針に転換してクロアチアの国権回復闘争を事実上放棄し、オーストリア＝ハンガリーが崩壊するまでハンガリー政府に追従する政権与党として行動した。

31 イワン・メシュトロヴィッチはザグレブの彫刻家であった。

32 もう少し詳しく経過を述べると次のようである。1912年と1913年のバルカン戦争でセ

ルビアが勝利した後、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ問題をめぐって緊張が高まっていたオーストリア＝ハンガリーとセルビアとの衝突は避けられず、この戦争はハプスブルク帝国内の南スラヴ人の将来を決定的に左右するという観測がクロアチア人やセルビア人の間で広がっていた。1913年末にアンテ・トルムビッチ、ヨシプ・スモドラカ（ダルマチア進歩党の指導者）、ニコラ・ストヤノヴィッチおよびアタナシエ・ショーラ（ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ出身のセルビア人政治家）はスプリットで会合し、オーストリア＝ハンガリーとセルビアとの間に戦争が起こったら、帝国内のクロアチア人とセルビア人の代表は外国に亡命し、南スラヴ人の解放とセルビアおよびモンテネグロとの統合のために政治活動を開始することを決めた。この取り決めに従って、トルムビッチは第一次世界大戦が勃発するやいなや隣国の中立国のイタリアに逃亡した。これにフラーノ・スーピロ、ザグレブ出身のヒンコ・ヒンコヴィッチらに加わった（スモドラカとショーラは当局に拘束された）。クロアチアからの亡命者は最初ヴェネチアに集合し、フィレンツェを経て、ローマに居を移し、そこで彫刻家のイワン・メシュトロヴィッチと落ち合った。

<sup>33</sup> Stephen Gazi, *A History of Croatia*, Barnes & Noble Books, New York, 1993, p.245.

<sup>34</sup> これに対して、イギリスの大使は彼ら三人を好意的に迎えた。大使のレネル・ドッドは、シートン＝ワトソンの著作『南スラヴ人問題とハプスブルク帝国』（1911年）を通して、スーピロを知っていた。以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.336-327.

<sup>35</sup> クロアチア人とスロヴェニア人はともにカトリック教徒であり、フランスとイタリア外交筋が考えた案は、彼らをまとめてカトリック教徒の国家を形成しようというものであった。恐らくは、正教徒のセルビアと対抗させるねらいがあったと思われる。

<sup>36</sup> 以上、Matkovic, *Povijest Jugoslavije*, Nklada Pavicic, Zagreb, 1998, p28、による。

<sup>37</sup> ニコラ・ストヤノヴィッチとドゥシャン・ワシリエヴィッチ。二人は、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナのセルビア人政治家。このうち、ストヤノヴィッチは、すでに述べたように、アンテ・トルムビッチの同志であり、第一次世界大戦開戦時にセルビアに亡命していた。

<sup>38</sup> これによってトルムビッチらの運動はセルビア政府の財政的支援を受けることになった。セルビア政府と合意された委員会の役割は、南スラヴ統一国家（場合によってはセルビア人・クロアチア人の国家）の実現のため、情報宣伝活動をする事、セルビア軍によって解放された後に適用される国家組織について諸提案をまとめ、セルビア政府に報告することであった。

<sup>39</sup> 彼らの多くはピッツバーグとシカゴの工場で働いていた。亡命者集団側のオルグ活動の結果、1915年4月10日・11日にシカゴで南スラヴ人移民者の大会が開かれ、トルムビッチらの運動組織を彼らの代表機関として承認し、財政的支援を決めた。またワシントンに南スラヴ民族評議会が設立された。

<sup>40</sup> この結果、グスタフ・グレゴリン、ディンコ・トリナイスチッチ、ミラン・マリヤノヴィッチ、ヒンコ・ヒンコヴィッチ、フランコ・ポトチニャクといった有力な政治家が亡命者集団のメンバーに加わった。しかし、クロアチア最大の政治集団の「クロアチア人・セルビア人連合」、スロヴェニアの最大多数政党の人民党は、オーストリア＝ハンガリー政府の弾圧を恐れて、トルムビッチに対する支持を留保した。

<sup>41</sup> 事件については注29を参照。

<sup>42</sup> 彼はイギリスに知人・友人が多い。とくにロバート・ウィリアム・シートン＝ワトソンと、その友人のヘンリー・ウィッカム・スティードは、オーストリア＝ハンガリーの解体と南スラヴ人統一国家の創設を支持し、スーピロおよびユーゴスラヴィア委員会の活動を熱心に支援した。シートン＝ワトソンは『南スラヴ人問題とハプスブルク帝国』（1911年）の著者であり、バルカン問題の専門家として知られる。スティードは『タイム』誌のウィーン特派員を以前に務め、第一次世界大戦中は同紙の編集者になっていた。シートン＝ワトソンは、1914年9月に「セルビア救済基金」を、1916年10月に「大英帝国セルビア協会」を設立、雑誌「新しいヨーロッパ」を発行して、オーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人の解放とセルビアとの統合国家の形成を支持した。

<sup>43</sup> Gazi, *A History of Croatia*, p.246.

<sup>44</sup> このほか、ロンドン条約は、アルバニアのヴローラ（ヴァロナ）港および、シャザン（サセノ）島、ドデカネーゼ諸島、アフリカにおける新たな領土、アルバニアに対する外交保護権などをイタリアに約束した。

<sup>45</sup> Gazi, *A History of Croatia*, p.246.

<sup>46</sup> イタリアと協商国との交渉は秘密裏に進められていたが、ロシア外相サズノフと会談中にこの秘密協定の存在を知り、トルムビッチとパシッチに直ちに伝えた。スーピロは、この条約の締結を阻止するため、パシッチに支援を求めた。ところがこのときロシアは、ブルガリアを協商国の側に引き入れるための条件の一つとして、セルビアがバルカン戦争で獲得したマケドニアの一部をブルガリアに譲渡するようにセルビアに熱心に働きかけており、その見返りとして、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ、ダルマチアの南部、スラヴォニア東部をセルビアに与えようとしていた。そのため、条約締結交渉の最終局面でイタリアに割譲される領土は若干縮小され、ダルマチアの南部がセルビアとの交渉のために留保されていた。ロシア政府はこのことをすでにパシッチに示唆していた。それはセルビアにとって魅力的な条件であり、この点でロンドン条約はセルビアにとって受け入れ可能であった。ただし、セルビアの頭越しに結ばれた条約をセルビア政府が公然と支持することはできなかった。セルビアの野党勢力の圧力もあり、パシッチは、イタリアの東アドリア海沿岸部の領有計画に抗議する演説を議会でを行った。以上、Stephen Gazi, *A History of Croatia*, p.246、Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, Cornell University Press, 1984, pp.119-120、Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.30の付表による。

<sup>47</sup> *Ibid.*, p.248.

<sup>48</sup> イタリアが加わったため、以下では協商国陣営を連合国と呼ぶことにする。

<sup>49</sup> 以上、Matkovic, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.31、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.360による。なおユーゴスラヴィア委員会の結成直後トルムビッチはロシアのフランス大使にその活動目的を説明したところ、この大使は、ロシアは正教徒が他の信仰の人民に融合することに反対であることから、正教徒のセルビア人とカトリック教徒のクロアチア人が合同国家を形成することを許さないと返答し、南スラヴ統一国家構想をあからさまに却下したという（Stephen Gazi, *A History of Croatia*, p.247.）

<sup>50</sup> Ivo John Lederer, “Nationalism and the Yugoslavs”, in Peter F. Sugar and Ivo John Lederer (eds.), *Nationalism in Eastern Europe*, University of Washington Press, p.428.

<sup>51</sup> ただし諸政党の中では、独立急進党だけは「南スラヴ共同体の精神を涵養すること」をセルビアの政治課題として提起していた。セルビア社会民主党は、バルカン連邦共和国の実現を提起していたが、その影響力はきわめて小さかった。そもそもセルビア人だけでなく、クロアチア人やスロヴェニア人を統合することが語られるようになったのは、セルビアに親ロシアの王朝が出現した1903年になってのことであった。しかし、その場合もクロアチア人とスロヴェニア人の居住地を将来の大セルビアに併合することが想定されていた。ボージョ・マルコヴィッチは「スラヴの南」を機関誌として始めた運動も、セルビアを解放の旗手として南スラヴ人の国家を形成する思想に基づいていた。つまり、セルビアでは、南スラヴ人の居住地域の統合を支持するグループもまたセルビアを中心とする統合を想定し、それによってセルビア人をひとつの国家に統合するという目的を実現しようとしていた。（以上、Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, pp.32-33）

またイヴォ・バナッツは、19世紀から20世紀にセルビア人とクロアチア人の間で流布した各種の民族イデオロギーを比較検討して、南スラヴ統一主義（Yugoslavism）という考え方に対して、セルビア人とクロアチア人では受け止め方が異なっていたことを指摘して、こう述べる。「少数民族の地位を承認することを含めて、南スラヴ統一主義がそれぞれの南スラヴ人の国家（statehood）と独立性（independence）を尊重することを意味するという信念は、セルビア人の間では、クロアチア人の中でそうであったようには広がっていなかった」。このような相違をもたらした要因として、バナッツは、両民族の支配的な民族イデオ

ロギーの内容がまったく違うということに加えて、セルビアが膨張と同化・吸収の歴史で発展してきた独立の民族国家であることを指摘している（Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, p.111）。

<sup>52</sup> 第一次世界大戦の開戦時、セルビアの関心は自国の自由と国土を守ることであり、南スラヴ人の統合国家の構想は眼中にはなかった。しかし、まもなくセルビアは戦争目的、つまり戦争に勝利した場合にセルビアが要求する領土について検討を始めた。連合国が、イタリア、ルーマニア、ブルガリア、ギリシアを中央同盟との戦いに参加させるため、バルカン半島の諸地域の割譲を条件に交渉を始めていたからであった。それは部分的にセルビアの利害に対立するものであった。こうして国際関係を考慮しながら、パシッチとセルビア政府は戦後に実現するセルビア国家の構想を始めた（Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.33）。

このときパシッチが恐れたのは、オーストリア＝ハンガリー帝国内のクロアチア人とスロヴェニア人に独立した政治単位を認める案が連合国の内部にあり、何らかの情勢で連合国がこれを支持するかもしれないことであった（Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, p.117）。そのような国家が成立した場合、ダルマチアやスラヴォニアなどセルビア人の居住地域が含まれることになる。それらは、セルビアが戦争に勝利した暁には、当然セルビアに帰属しなければならない領土である。またセルビアと敵対するオーストリア＝ハンガリーの軍隊は10万人の南スラヴ人を含んでいた。したがって、セルビアが戦争を有利に戦うためには、帝国内の南スラヴ人から支持を得ることが必要であった（John R. Lampe, *Yugoslavia as History*, Cambridge University Press, 1996, p.100）。こうしたことを考慮して、セルビア政府は南スラヴ人の統一国家の形成をめざすユーゴスラヴィア委員会の創設を支持し、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人同胞の解放と統合を戦争目的とするニーシュ宣言を打ち出したのであった。

<sup>53</sup> Hrvoje Matković, *Povijest Jugoslavije*, Naklada Pavičić, Zagreb, 1998, p.30.

<sup>54</sup> 開戦当初、バルカン諸国がどちらの側について参戦するかは、イタリアの態度とならんで、交戦国双方にとって重大な関心事であった。このうち、トルコは中央同盟側に付いたので、ブルガリアの帰趨が両陣営の強い関心の的となった。連合国側は、もしブルガリアが連合国側に付けば、トルコ領トラキアのほか、セルビア領のマケドニアとギリシア領の一部を与えることを提示した。そのため、連合国はセルビアおよびギリシアと交換条件を交渉していたのである。

<sup>55</sup> その内容は大略以下の通りである。(1)クロアチア人、セルビア人、スロヴェニア人は、同一の言語を話し、同一の種族(race)に属する単一の人民(one people)である。ただし、歴史、政治・法制度、文化的伝統が異なるので三つの名称で自己を表現している。(2)三民族の居住地域については、ハプスブルク帝国の領域では指導的役割は歴史的な取り決めによってクロアチアに属し、帝国外の領域では指導的役割はセルビアに帰する。セルビア、クロアチアの民族問題の解決に当たっては、両民族の政治的な対等性の原則が、信仰の自由・平等と同様に確立されなければならない。(3)クロアチア人にとっては、ザグレブを首都とするクロアチアはクロアチア主義の頭と心(head and heart)であり、同様にベオグラードを首都とするセルビアはセルビア主義の頭と心である。(4)セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の民族的統合の考えは、これら三民族を単一の自由な民族国家に統合することを意味する。三民族は独自の伝統と能力、活力でこの国家に貢献する。この国家はドイツの覇権主義に反対する自然な同盟となる。(5)この民族の統合と融合は、クロアチアが衷心からその仕事に協力しなければ適切に実現されない。したがってクロアチアがその統合国家から排除されるようなことはあってはならない。(6)もし統合国家がセルビアを拡大する形で形成された場合、セルビアは、南スラヴ統一主義の主唱者として、政治的、憲法的、道徳的な内部改革を実行する必要がある。(7)もしセルビアがそのような内部改革を行わない場合、クロアチア人とスロヴェニア人は、セルビアによる解放と統合を望まない。南スラヴ人統一の事業は将来に留保されるだろう。住民投票の結果によって多

数者がクロアチアとの統合を望む諸地域を統合する事業を擁護することが全クロアチア人の義務となる。Stephen Gazi, *A History of Croatia*, pp.248-250, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.355-356.

<sup>56</sup> それゆえ、パシッチは、統合国家の形成に関して他の南スラヴ人が独立の政治主体になることを望まなかった。亡命者集団がユーゴスラヴィア委員会を結成することを容認したのも、彼らがセルビア政府とセルビアの政策の範囲内で行動することを前提としていた。たとえば、そのため、ユーゴスラヴィア委員会が募集した志願兵の部隊に対してもセルビア軍の指揮官を送り込み、セルビア軍として動かそうとした。

<sup>57</sup> Hrvoje Matkovic, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.36, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.354-355.

<sup>58</sup> 1915年10月、ブルガリアは中央同盟に加担し、ドイツ、オーストリア＝ハンガリーとともにセルビアを攻撃した。セルビアは占領下におかれ、1916年春にセルビア軍と政府、王宮はコルフ島に退却した。

<sup>59</sup> *Enciklopedia Jugoslavije vol.4*, 1960, p.565.

<sup>60</sup> Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.353.

<sup>61</sup> Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.37.

<sup>62</sup> *Ibid.*, pp.37-38.

<sup>63</sup> *Ibid.*, p.38.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p.38.

<sup>65</sup> *Ibid.*, p.38.

<sup>66</sup> *Ibid.*, p.38-39, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.356-359.

<sup>67</sup> 戦争中の帝国内の政治生活は完全に停滞していた。オーストリア＝ハンガリー政府は反体制分子に対する弾圧と取締りを強化した。政党の活動は停止し、政治的な新聞の多くは休刊した。クロアチアの議会（サボル）はたまにしか開催されなくなった。

<sup>68</sup> Dušan Bilandžić, *Hrvatska Moderna Povijest*, p.47, Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, p.125.

<sup>69</sup> コルフ島は、ギリシア西部イオニア諸島の最北部に位置し、狭い海峡をへだててギリシアならびにアルバニアに面する島である。現代ギリシア語の正式名はケルキラ島。

<sup>70</sup> 革命後に成立した臨時政府は、かつてのようにセルビアを支援する余裕がなかった。それどころか外相のミリコフは、ブルガリアのマケドニア要求に好意的な態度を示して、セルビアの権益を脅かし、またオーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人の独立要求に理解を示す態度を示した。

<sup>71</sup> アメリカ大統領ウィルソンは、1917年1月22日に上院で語った「勝利なき平和」の具体的提案が、「無併合・無賠償」の原則を意味することを4月2日の対独宣戦のメッセージの中で明らかにしていた。

<sup>72</sup> セルビアの内部の政敵を倒し、黒手党が引き起こしたサラエヴォ事件の責任を逃れるため、パシッチは、黒手党指導者のディミトリヴィッチおよびその配下を逮捕し彼らに対して軍事裁判を企てた。ディミトリヴィッチとその2人の側近は処刑されたが、この裁判に抗議して1917年3月野党が政府を離れ、連立政権が一時解体した。野党指導者のリュボミール・ダヴィドヴィッチはその際、ユーゴスラヴィア委員会と交渉し、暫定協定を結ぶことをセルビア政府に求めた。

<sup>73</sup> ユーゴスラヴィア委員会を離脱したあと、スーピロは、その友人のスティードとシートン＝ワトソンが設立した「大英帝国セルビア協会」を拠点に、イギリス政府の外交当局に独自の働きかけをおこなっていた。スーピロは、セルビア政府の意図が大セルビア国家の実現にあり、セルビア人が居住する地域をオーストリア＝ハンガリーから奪ってセルビアに併合しようと考えていることを伝えようとしていた。彼らの試みは成功を収め、イギリス外相のグレイが南スラヴ人の統合国家に好意的な発言をするようになった。スーピロの活動について、パシッチは、ユーゴスラヴィア委員会のセルビア人メンバーを通して詳細な報告を受けていた。彼はスーピロの活動には強い懸念を抱いていた。もっぱらロシアに

依存してきたパシッチは、それ以外の連合国とは関係が薄かった。スーピロの反セルビア宣伝活動が連合国に浸透することを恐れたパシッチは、スーピロと対立していたユーゴスラヴィア委員会と協議し、南スラヴ統一国家構想に関するセルビアの意思を内外に公表することで、これに対抗しようと考えた。1918年にパシッチが語ったところによると、ロンドンにおけるスーピロとその協力者（大英帝国セルビア協会）の活動が、パシッチにユーゴスラヴィア委員会との協議を決意させた直接の要因であったという。以上、Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.362-363 による。

<sup>74</sup> 帝国議会は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国のうち、オーストリアが支配する地域の代表によって構成される議会であり、そこにはスロヴェニア、イストラ、ダルマチアなどの南スラヴ人諸地域から選出された議員が含まれていた。彼らは、1917年5月29日に会合し、ユーゴスラヴィア・クラブを結成した。クラブの議長にはスロヴェニア人政治家のアントン・コロシェツが選ばれた。クラブは33人の議員からなり、18人はスロヴェニアの神父、2人はスロヴェニア自由党员、2人はイストラのクロアチア人民党员、4人はダルマチア権利党员、7人はダルマチアの自由党员であった。

<sup>75</sup> なおチェコ人議員、ポーランド人議員、ウクライナ人議員もそれぞれ別個に、「5月宣言」と同種の宣言を帝国議会で行った。これらは必ずしもオーストリア指導部の意向に反するものではなく、むしろその意向に沿う側面もあった。当時、ウィーンの宮廷と政府は単独講和の道を密かに模索しており、帝国を近代的・民主的な多民族国家に再編成することで、連合国との休戦協議を円滑に進めようというねらいがあったのではないかとみられている（Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.43）。

<sup>76</sup> 委員会のメンバーアンテ・マンディッジは次のように述べた。「国外では五月宣言は委員会に打撃的な影響を与えた。『ハプスブルク王朝の支配のもとにおく』という一句はこれまで積み上げてきた委員会のすべてのプログラムを否定した。その一句から明らかになるのは、帝国の南スラヴ人はハプスブルク王朝の忠実な支持者であり、その支配下にとどまることを望んでいるということである。彼らは本音ではセルビアとの統合を望んでいると訴えてきた委員会の試みは水泡に帰した」（*Ibid.*, p.43）。

<sup>77</sup> トルムビッチに送った招待状の中で、パシッチは、ユーゴスラヴィア委員会に対し、クロアチアのクロアチア人（トルムビッチはダルマチア出身であった）ボスニアのセルビア人、スロヴェニア人を連れてくるように要請した。委員会はこの提案を受け入れた。クロアチアからはヒンコ・ヒンコヴィッチ、ボスニアからはドゥシャン・ワシリエヴィッチ、スロヴェニアからはボグミール・ヴォシュニャクがトルムビッチに同行した。これに対してセルビア側の参加者は、パシッチ、ストヤン・プロチッチ、マルコ・ジュリンチッチ、モムチロ・ニンチッチ（以上政府代表）リュバ・ダヴィドヴィッチ、ミロラド・ドラシュコヴィッチ、ヴォヤ・マリニコヴィッチ（以上野党代表）であった。会議は6月15日に始まり、7月20日の宣言で終わった。この間、合計24回の会議が開かれた。

<sup>78</sup> Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, p.47, Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.367.

<sup>79</sup> ユーゴスラヴィア委員会の事情としては、協議が不調に終わった場合、南スラヴ統一国家構想の実現性がないことが内外に明らかになり、彼らの運動は立場がなくなる。またセルビア政府とユーゴスラヴィア委員会の意見の相違がオープンになると、それによってイタリアの東アドリア海沿岸部に対する領土要求が有利になることをトルムビッチは恐れた。こうしたことを念頭に、トルムビッチは可能な合意点に達すれば署名することにし、メンバーの同意を求めた。以上、Stephen Gazi, *A History of Croatia*, pp.254-255.

<sup>80</sup> 国家の名称については、ユーゴスラヴィア委員会は「ユーゴスラヴィア」という名称を提案した。セルビア側はこれを拒否し、統一の人民名称として「ユーゴスラヴィア人」という言葉を使用することも留保した。パシッチは、新しい名称を用いる気は毛頭なく、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人という旧来の名称を支持していた。最終文書にユーゴスラヴィアという名称が使用されるのは一度だけである。パシッチは新しい国家名

称はそれぞれの名を否定することになるので、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」と新しい合同国家を呼んでどうかと述べた。つまりセルビアという名を残したかった。このほかにも様々な名称案が提出されたが、最終的には新しい国家の名称はやはり「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」と名付けられることに落ち着いた（Hrvoje Matković, *Suvremena političke povijest Hrvatske*, pp.46-47）。

<sup>81</sup> なお興味深いのは、パシッチは、ユーゴスラヴィア委員会とのコルフ島での会議に先立って、スーピロに間接的に意見を打診していたことである。スーピロは、すでに述べたように、メンバーとの意見対立からユーゴスラヴィア委員会を離脱し、独自の活動をロンドンでおこなっていた。パシッチは、ロンドンのセルビア大使を介して将来の統一国家はどのように組織されるべきかについて意見を求め、スーピロは1917年7月22日の手紙でこれに答えている。それによると、スーピロは、統一国家をセルビア、クロアチア、スロヴェニア、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロの各地域からなる自治単位の連合体として構想していた。この国家は一つの憲法をもち、外交、軍隊の管理、全国的に必要な経済・交通上の重要事項、貨幣政策、共通経費の財務、高等教育機関の管理を共通業務として共同で担当するほかは、各自治単位の自治に委ねる。スーピロは、連邦国家というよりも連合国家に近い形態を構想していたようである（Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, pp.368-369）。スーピロはこの後まもなく、1917年9月28日、ロンドンで病死した。

<sup>82</sup> 1918年にパシッチ自身が『タイム』誌の編集長スティードのインタビューに答えてそのように語っている（*Ibid.*, p.363.）。

<sup>83</sup> *Ibid.*, p.370.

<sup>84</sup> 1917年9月、パシッチはローマでイタリア外相ソニーノと会談した。ソニーノはロンドン秘密条約の交渉者の一人である。両者は共通の戦争政策について完全に合意に達した。それはオーストリア＝ハンガリー内の南スラヴ人の地域をイタリアとセルビアで分かち合い、「コルフ宣言」で示された南スラヴ人統一国家の構想を挫折させることを意味した（Stephen Gazi, *A History of Croatia*, p.257）。

<sup>85</sup> 1918年1月18日に発表された14か条の宣言において、アメリカ大統領ウィルソンはオーストリア＝ハンガリー帝国内の被支配諸民族にできるだけ大きな自治を付与することを提案したが、独立には言及しなかった。その3日前には、イギリス首相ロイド・ジョージは、オーストリア＝ハンガリー二重帝国の解体は連合国の戦争目的ではないことを表明していた。パシッチは、これらを踏まえて、オーストリア＝ハンガリー帝国が戦後に維持された場合に、オーストリア＝ハンガリーが行ったボスニア＝ヘルツェゴヴィナ併合を無効にすることをアメリカが支持し、それによって少なくともセルビアがこれを確保できるようにアメリカに働きかけることができるかどうか、ワシントンの公使に報告を求めている。パシッチは、こうした打診行為を秘密にし、ユーゴスラヴィア委員会に知られないようにした（Ivo Banac, *The National Question of Yugoslavia*, p.126）。

<sup>86</sup> *Ibid.*, p.124.

<sup>87</sup> Josip Horvat, *Politička Povijest Hrvatske 1*, p.369. 実際、1918年12月に新国家が樹立されたときには、クロアチアの伝統的な国権に保障は与えられなかった。クロアチアの議会（サボル）と自治権は否定され、歴史的な境界を無視して行政区域が設定された。これによって、クロアチア人は歴史的なアイデンティティを失うことになった。

<sup>88</sup> こうしたことに対する批判から、現代のクロアチアではユーゴスラヴィア委員会に対して厳しい評価を下す向きがある。それによれば、トルムビッチらは「十分な保障措置をとりつけることなく、セルビアの食器皿の上にクロアチアを手渡した民意を代表しない知識人のクリーク」とみなされる（Marcus Tanner, *Croatia : A Nation Forged in War*, Yale University Press, 1997, p.115）。

<sup>89</sup> セルビアの自治の国際的承認（1815-32年）主権の要求（1832-56年）バルカンにおける指導権の要求（1860-68年）マケドニアにおける文化財所有の主張（1870-76年）お

よび領土拡大の努力（1877-1918年）はすべてセルビア民族あるいはセルビア主義の名においておこなわれた。I. J. Lederer, "Nationalism and the Yugoslavs", in P. F. Sugar and I. J. Lederer(eds.), *Nationalism in Eastern Europe*, p.406.

<sup>90</sup> Ivo Banac, *The National Question in Yugoslavia*, pp.116-117.

<sup>91</sup> *Ibid.*, pp.118-119.

<sup>92</sup> *Ibid.*, p.119.